

## 『白鯨』のかくれた意味と象徴(8)

前 田 禮 子

### 'The Cabin'

第CXXIX章は、劇の形式になっている。*Moby-Dick*の多くの章が劇の形式をとっているが、なぜそうしなければならなかったのか、その理由はなにだろうか、という疑問にたいして、考えられるのは、まず、Ahabをはじめ登場人物のすべてが運命によって動かされる駒のような働きをしているのをMelvilleが強調したためではなかったか、ということである。Ishmaelというすべてを見通す人物によって語られるという形式も、白鯨追求譚が運命という見えぬ手によって仕組まれたものであるかのように示すための手法である。その意図をいっそう押し進めたのが、劇形式である、といえないだろうか。白鯨物語のすべてを照覧する眼があるということを示すために劇形式をとった、といえないだろうか。たしかに、小説の形式の中に劇形式がまぎれ込んでいるように見え、手法の不統一が作品の欠点であるような印象を与えるが、それを作者の気まぐれと断定すべきではない。

Ishmaelは物語のすべてを照覧する眼をもっている。このことも、予言者のような語り手を介在させたところの、姿なき御手、といった存在を想起させるための手法ではなかっただろうか。*Moby-Dick*は聖書から手法を借りているといえないだろうか。聖書で語られている話は、語り手を通してあるべきとそうでないべきがある。それをまねてMelvilleはIshmaelの眼を通さない箇所、つまり劇形式、を置いたのではないだろうか。

劇形式になっている章の分布状態は、つぎのようになっている。まず最初は、Ahabがはじめて甲板に姿を現わす第XXIX章'*Enter Ahab, to him, Stubb*'である。冬至の頃の降誕日に出港して以来はじめて姿を現わす、ということは、船が太陽の動きに合わせて航海を始めたことになるので、Ahabの出現は、おそらく、キリストの公現日の1月8日頃ではないかと思われる。カトリック暦では、太陽とキリストを同一視して祝祭日を定めているからである。冬至は、太陽の誕生を祝う日であり、カトリック暦では、それがクリスマスに当てられている。つぎに劇形式があらわれるのは、第XXIX章から第XL章までの、連続した五章、つまり、'*The Quarter-Deck*', '*Sunset*', '*Dusk*', '*First Night-Watch*', '*Midnight, Forecastle*'である。このあたりの季節は春分の頃である。太陽は黄経0°にあり、船も経度0°の赤道付近にいるものと思われる。太陽は昼夜平分線を越え、教会暦

ではキリストの復活を祝う季節である。つぎに劇形式になっている章は、第CVIII章 ‘*The Deck. Ahab and the Carpenter*’ と第CXX章から続けて三章 ‘*The Deck*’, ‘*Midnight, on the Forecastle*’, ‘*Midnight, Aloft*’の四章である。船はこのころ日本近海を通過している。このあたりの船の動きは太陽の運行とは関係がない。船は、台風にあうので、むしろ、つむじ風の中の神にまみえる、といった体験をする。つづいて最後に劇形式があらわれるのは、第CXXVII章の、ふたたび ‘*Ahab and the Carpenter*’ と第CXXIX章の ‘*The Cabin*’ の二章である。最後の二章は、物語も終わりに近づき、季節は秋分の頃である。‘*Ahab and the Carpenter*’ という章は二回あって、いずれも劇形式になっている。大工は神の代理人のような役割をしているので、大工の章は特殊な章と考えられているのだろう。秋分は、太陽が昼夜平分点を通過して、黄道が天の地平線の下に沈みはじめる日である。太陽は、黄経180°の秋分点にいる。そのとき船も白鯨とともに、太陽の出入口とも言うべき経度180°と赤道の交わるところで海へ沈んでいく。秋分の頃には、カトリック暦では、聖ミカエルの一級大祝日がある。聖ミカエルは、この日には、人の魂を天国へ導き入れる、とされている。日本でも、春分と秋分は、この世とあの世の橋渡しをする彼岸の日のさされているなど、もっとも大切な季節の節目である。以上劇形式になっている章は、春分と秋分、日本近辺、大工の登場するとき、および、Pipが最後に登場するとき、の章である。Pipは、ギリシャ神話のオルフェにたとえられているので、魂の復活を唱えた宗教であるオルフェ教と比較してとらえられるべきだろう。以上劇形式になっている章はいずれも、運命を決定づける重要な章である。宿命や神慮のはからいによって物語が進行するのであるという印象をつよめるために、登場人物の自由意志が奪われた劇形式がもちいられたのだと考えられる。

### ‘*The Castaway*’

これは、Pip少年が海の上に一人取り残されて漂う経験をする章である。Pipは、周囲を取り巻く地平線の大きな円の中にいる。このときの彼の頭は、水をたたえた大きなコップの真中に、芥子種のように浮んでいる。このときの彼の姿は、‘*Chase—The Third Day*’ の章で、Stubbがつぎのように言う個所と対照的である。

I would yet ring Glasses with ye, would ye but hand the cup! cherries!  
cherries! Oh Flask, for one red cherry ere we die! (p.720)

Stubbは、日や月や星と乾杯のグラスを打ち鳴らしたい、死ぬ前に赤い桜桃がひとつあればよいのに、と言う。このときStubbは、Flaskよ、と呼びかけている。ここで、コップという名のFlaskの名が、生命を与える奇跡の聖杯、を意味する象徴であるのがわかる。‘*The Castaway*’では、Pipは、海水のはいった大きなコップの中心にいて、Pipの名が示すように、種子として存在している。Stubbが欲しいと言っているコップとPipが浮かん

### 『白鯨』のかくれた意味と象徴(8)

でいる海とは、大小の違いはあれ、同じ実体である。また、太陽で日焼けしたかのようなPipの黒い頭は、アポロンの息子であるオルフェの頭が流されて波間に漂う姿と構図が同じである。*Moby-Dick*にはかくれた主題があつて、それは、ギリシャのオルフェ神話であり、タンバリンを奏でるPipによって示されている。*Moby-Dick*がアルゴ船の航海に擬せられているのは言うまでもないが、オルフェもそのときアルゴ船に乗っていた。とくに、ながくのちまで信仰対象となつたところの、宗教としてのオルフェが、*Moby-Dick*と深く関わっている。オルフェ信仰は、キリスト教のもととなつた復活と靈魂の不滅を説く。オルフェの頭は、切り落とされたのちも歌い続け、そのうえ予言を語ることもできた、と伝えられている。

オルフェは、バッカスの酒を飲んだ女たちによって命を落とした。一方、Pipは、いわば、海の盃から飲んでおぼれ、彼の魂と体とは分離してしまう。Pipの魂は常世の国に行つてしまい、残った体は、オルフェの頭のように、天上の歌を歌い、知恵の光を発つ。オルフェのばあい、彼は、愛する妻エウリディケと離れ離れになり、妻を慕う。Pipのばあい、靈魂と肉体が離れて、彼の肉体は彼の靈魂を慕い求めている。*'Loomings'*の章で、Ishmaelはつぎのように言うが、これもオルフェと関わっている。

And still deep is the meaning of that story of Narcissus, who because he could not grasp the tormenting, mild image he saw in the fountain, plunged into it and was drowned. But that same image, we ourselves see in all rivers and oceans. It is the image of the ungraspable phantom of life, and this is the key to it all. (p.26)

Narcissusが水の中に見たものは、Pipが海で失つたもの、つまり、自己の魂であつた。それをMelvilleは、phantom of life であると云っている。Narcissusは水の中の自分のidentityをとらえようとして溺れてしまうのであるが、この話は、二通りに解釈できる。ひとつは、いわゆる自己陶醉Narcissismといわれるような、自己を失つて破滅するの言う。もう一方は、identityを見出し、それとの合一を果し、朽ちることの確実な肉の身から解脱した、という解釈である。キリスト教では、肉の身をみずからすすんで捨て、キリストの姿と合一することが、死を征服する方法である、と説いている。Narcissusについての後者の解釈は、キリスト教の教義と共通するところがある。また、Ahabがすすんで死を求めると共通するところがある。オルフェ教の象徴儀式の中には、魂が悟りと救いに至る修練の最終段階として、鏡の間を通過する儀式、がある。そのとき人は鏡の中に真の自己を見つると言う。そのとき、深い海からのように、潜在意識の中から、永遠の生命であるentityが姿を見せるのだろう。それが、Melvilleの言うphantom of lifeであろう。肉の身を溺れさせ捨てるのが、永遠のentityを得る方法であるというのだろう。キリスト教の洗礼の儀式は、Narcissusの変身譚とオルフェ教の秘儀の中にその根源

『白鯨』のかくれた意味と象徴(8)

の意味を見出すことができる。Ishmaelは、this is the key to all, と言って、これが *Moby-Dick* を解く鍵である、と示唆している。

丸い海面は鏡のように見える。それについて 'The Castaway' には、つぎのような描写がある。

Poor Pip, ye have heard of him before, ye must remember his tambourine on that dramatic midnight, so gloomy-jolly. (p.526)

Though, ere long will be seen, what was thus temporarily subdued in him, in the end was destined to be luridly illumined by strange wild fires, that fictitiously showed him off to ten times the natural lustre with which in his native Tolland County in Connecticut, he had once enlivened many a fiddler's frolic on the green, and at melodious even-tide, with his gay ha-ha! had turned the round horizon into one star-belled tambourine! (p.527)

ここでは、Pipは黒いオルフェである。彼は闇の中で光り輝く。Connecticutの故郷の夜の平原で多くの人々と楽しく笑いタンバリンを打つPip、ここでも、平原の周囲を取り巻く地平線の輪があつて、それが、星屑の鈴をつけたPipのタンバリンとなる。それとも、つぎのように云うべきだろうか。タンバリンのような大きな黒い鏡があつて、その中央に黒いオルフェが見える、というべきだろうか。Pipは、Tolland County in Connecticutの出身である、と述べられている。彼の出身地名は象徴としての意味がある。Tollandは、toll+land, とむらいの鐘の国を意味する。Connecticutは、connection+cut, この世と関係を断った、を意味する。Pipは、第XXVII章で、Alabama boy (p. 161)であると云われる。ConnecticutとAlabamaはことなる州であるが、どの地名も象徴としてもちいられている。Pipがどの州の出身であるか特定できなくても、矛盾していると考えべきでない。州名のAlabamaには、Here we rest, というモットーがある。Connecticutには、Qui Transtulit Sustinet, or He who transplants still sustainsというモットーがある。Here we restは墓碑銘として使われることができる。これらの地名やモットーには死が漂よっている。transplantは、あの世に移しかえる、また、sustainは、靈魂が生きながらえる、をそれぞれ意味しているのが感じられる。transplantは、植物の移植、を意味することや、Pipの名が種子、であるなど、Pipが、生命の存続を説くオルフェ教の構図をふまえているのは、明らかである。*Moby-Dick*には、オルフェの死とキリストの殉難の図が、矛盾なく組みこまれている。Pipがオルフェを、また、Ahabがキリスト的死を、模倣しているが、しかし、どちらかといえば、Ahabは、キリスト教の儀式を多く踏襲するので、Ahabはキリスト教の母胎であるオルフェ教の要素を多く含んだキリスト像を倣っている、といったほうがよいかもしれない。

‘The Hyena’

この章は、なぜ‘The Hyena’と名づけられているのか、について考えてみなければならぬ。前章の‘The First Lowering’で、Ishmael, Queequeg, Starbuckの乗りこんだ小舟が母船に帰ることができなくなり、あくる朝まで漂流しなければならなかった。危うく助かったIshmaelは、捕鯨稼業を嘆くでもなく、きわめて晴れやかな気分になっている。Ishmaelという名は聖書から取られた名であるが、原型となったIshmaelは、砂漠をさまよって、結局救われた。Moby-DickのIshmaelが最後に一人生存することができたのも、ヨブ記はさておき、原Ishmaelをかたどったものであろうが、‘The Hyena’の章でも、同様に、原Ishmaelを見ることができる。

注目すべきは、‘The First Lowering’でIshmaelらが追跡した鯨は、白い鯨であったことである。理由は、

“That’s his hump, *There, There*, give it to him!” whispered Starbuck. (p. 300)

Starbuckが、そら瘤だ、といったからである。また、Moby Dickは、他の鯨と違って、熱い汐を吹き、あたりに熱気が立ちこめるのが特徴であるが、ここでも、つぎのように、Ishmaelが熱い湯煙を感じたからである。

A gush of scalding vapor shot up near by, something rolled and tumbled like an earthquake beneath us. The whole crew were half suffocated as they were tossed helter skelter into the white curdling cream of the squall. Squall, whale, and harpoon had all blended together, and the whole, merely grazed by the iron, escaped, (p.300)

攪はんされたクリームのような白い水しぶき、銛がかすただけで逃げてしまった、など、熱く、白く、不死身である、といわれるMoby Dickの特色が明らかである。Moby Dickが太陽の性質をかりているのが明らかである。

Ishmaelは、どんな苦難も、死ですらも、気軽に心良く受け入れることができる、という。

And as for small difficulties and worryings, prospects of sudden disaster, peril of life and limb, all these, and death itself, seem to him only sly, good-natured hits, and jolly punches in the side bestowed by the unseen and unaccountable old joker. That old sort of wayward mood I am speaking of, comes over a man only in some time of extreme tribulation, it comes in the very midst of his earnestness, so that just before might have seemed to him a thing most momentous, now seems but a part of the general joke. There is nothing like the perils of whaling to breed this free and easy sort of genial,

desperado philosophy, and with it I now regarded this whole voyage of the Pequod, and the great White Whale its object. (p.302-3)

Ishmaelは、現世の命に執着しないことが肝要である、と説いているのではないだろうか。現世の命を軽んずるように、とは云っていないが、しかし、力を尽くしたあとは、心広く死を受け入れるべきだ、とIshmaelは云っているのではないだろうか。キリスト教にしろ、仏教にしろ、すすんで死を受け入れる心になることが、死を克服し、永遠の生命を得るためには不可欠である。自分を捨てることが自分を得る方法である、というのがすべての宗教の要諦である。Ishmaelもそのように説いているのではないだろうか。

Pequod号の航海とその目的である、白い鯨、の象徴性が、以下の、航海士らの証言によって明らかにされる。

“I suppose then, that going plump on a flying whale with your sail set in a foggy squall is the height of a whaleman’s discretion?”

“Certain, I’ve lowered for whales from a leaking ship in a gale off Cape Horn.”  
(p.303)

霧の突風の真只中を、疾走する鯨の上に、真逆様に飛びこんでいくのが、分別のきわみである、と云えるだろうか、とIshmaelがStubbにたづねると、Stubbは、そうだ、と言う。その姿は、磔刑像の変形である。‘*The Spouter-Inn*’には、これとは逆に、船の真上から鯨が帆柱に串差しになろうとしている絵がある。

The picture represents a Cape-Horner in a great hurricane. The half-foundered ship weltering there with its three dismantled masts alone visible, and an exasperated whale, purposing to spring clean over the craft, is in the enormous act of impaling himself upon the three mast-heads. (p. 36-7)

この絵の説明文の調子と、‘*The Hyena*’のIshmaelとStubbの会話の調子とは、まったく対照的である。前者は暗く荘重そのもの、後者は軽快で明るい。しかし、どちらの文も、言っている内容は同じである。Cape Horn沖で、なかば沈みかけた船から、鯨に立向っていった、という点で同じである。Cape Horn沖で鯨と、それも白い鯨と、対決することに、格別の意味があるらしい、ということになる。*Moby-Dick*の多くの章で、くりかえしCape Hornについて言及がある。Cape Hornがなにを象徴しているかを知ることが、*Moby-Dick*を理解するためには、必要である。Cape Hornとは、<sup>つ</sup>の<sup>の</sup>形をした、あるいは、三日月の姿をした、岬である。三日月の象徴については、‘*Hark*’の章で、すでに述べた。<sup>つ</sup>の<sup>の</sup>も三日月も、どちらも豊穡のシンボルである。Pipは、彼自身のことを、cowardである、とたびたび云う。いわば、雌牛の方向、cow+ward、の意であるから、これも、Cape Hornと同様に、豊穡、を意味しているだろう。三日月は、赤道あたりでは、水平になって、舟のかたちに見える。Pequod号の名は、pea+cod、または、pea+

pod、豆のさや、となって、Pequod号そのものが、三日月型をした豊穡のシンボルである。これらの豊穡の概念は、さらに一括して、アルファベットのCの文字として、記号化されているのは、『*The Loomings*』の章ですで見えてきたとうりである。また、Melvilleは、地球的な規模の地形の中に、Cの文字を見出している。それが、Cape Hornである。これについては、『*The Pacific*』の章で、さらに述べることになるが、要するに、太平洋は、周囲を大陸に囲まれた海洋であるから、そのいわば、丸い円形の太平洋へ入っていく入口が、Cape HornとCape of Good Hopeとのはざまである、と考えられているのである。Cape HornとCape of Good Hopeは、いわば、太平洋へ入っていくための門を構成する二本の柱の突端にあたる。南アメリカ大陸とアフリカ大陸は、さきのとがったつの型の、大きな二本の門柱となる。そのかたちは、海を抱きかかえたHorn、あるいは、三日月、のかたちになる。そのかたちは、小さくは、アルファベットのCの文字、に収斂する。『*The Town-Ho's Story*』で、Cape of Good Hope周辺は交通の行き交う十字路である、と述べられている。

The Cape of Good Hope, and all the watery region round about there, is much like some noted four corners of a great highway, where you meet more travellers than in any other part. (p.321)

と書かれている理由も、上述の説明によって理解できるだろう。Pequod号の航海の目的は、hornのかたちをした、豊穡の海、の中へ入っていくことである。それでは、Ishmaelははれやかな気分にもなるだろう。Pequod号の航海が悲劇であるとするか、そうでないとするかは、視点の相違による。キリストの受難を、勝利であるとするか、そうでないとするか、の違いと同じである。さきに、死、があつて、そのあとに、復活、があるのであるから、復活の可能性があれば、死は悲劇ではなくなる。Cape Hornへの言及は、その可能性があることへの示唆である。上の引用文では、垂直に飛びこむ、plumb、に注意のこと。plumbという語は、『*Moby Dick*』の中では、ひんぱんに使われており、十字架様の運動を暗示する。

つづいて、Ishmaelは、Flaskに証言を求める。

“Will you tell me whether it is an unalterable law in this fishery, Mr. Flask, for an oarsman to break his own back, foremost into deaths’ jaws?”

“Can’ t you twist that smaller?” said Flask, “ Yes, that’s the law, I should like to see a boat’s crew backing water up to a whale face foremost. Ha, ha! the whale would give them squint for squint, mind that!” (p. 303)

Ishmaelは、うしろを向いたまま死のあごの中に飛びこまなければならないのか、とFlaskに問う。Flaskは、船乗りは横目で見ながら鯨の顔に水をかけてやるとよい、そうすると、鯨も横目で見かえすだろう、と云う。この対話は、エレミヤ書(18:17)と比

較対照するとわかり易い。Melvilleは、この箇所を、つぎのように、‘*The Tail*’ に引用している。

Thou shalt see my back parts, my tail, he seems to say, but my face shall not be seen. (p.486)

エレミア書では、つぎのように、人と神が顔と顔を見合せると、人は死ななければならない、と書かれている。

I will scatter them as with an east wind before the enemy; I will show them the back, and not the face, in the day of calamity.

### ‘*The Tail*’

第LXXIII章は、「出エジプト記」の第33章の、「あなたはわたしのうしろを見ることはできるが、わたしの顔はけっして見られない」と対照させて書かれた章である。上の引用文の出典がモーゼの「出エジプト記」にあることは誰しも周知であるにもかかわらず、第33章から引用、とわざわざ書き加えられているところに、ある意味がかくされている。

33という数は、32プラス1である。32というのは、船の羅牌の周囲が32等分されている目盛数に等しい。一つの目盛は一点 (point) と呼ばれ、円周360°を32で割った数、 $11\frac{1}{4}$ 、である。32点に1点を加えた方位は現実には存在しない。それとも、円の中心が一点として考えられているのかもしれない。「出エジプト記」の33という数と羅牌の32という数とはたがいに象徴としてもちいられていると考えてよいだろう。あるいは、単純に33という数は3ポイントつまり約33°と理解すべきかもしれない。そうすると、3ポイントの3という数は三位一体を表わす数である考えられる。

3ポイントという数はたびたびつかわれている。たとえば、Try-Pots亭を探すように云って、Peter Coffinが与えた道順に、道を3ポイント方向転換するように、というのがあった。そうして探し当てたTry-pots亭は、仰角3ポイントの直角三角形をかこむ円の中心点にあった。また‘*Chase—The Third Day*’でAhabがMoby Dickの姿を発見したのは、つぎの引用文にあるように船首風上側の約3ポイントの方向である。

But at last, some three points off the weather bow, Ahab descried the spout again, and instantly from the three mast-heads three shrieks went up as if the tongues of fire had voiced it. (p.711)

さて、‘*The Tail*’では、尾が、神性を表現するためにどのような構造につくられているか、について述べられている。

In no living thing are the lines of beauty more exquisitely defined than in the crescentic borders of these flukes. (p.481)

尾は、翼のように左右に広がって下部には新月のような輪郭ができる。つ形の三日

『白鯨』のかくれた意味と象徴(8)

月が豊穡の象徴であるのは言うまでもないが、地球上のさまざまな緯度の地方でさまざまな違った角度の三日月ができる。しかし、ほとんどのばあい偏よった形をしている。水を満した水盤のような、雌牛のつもののような、あるいは、空中に突き立てた鯨の尾の新月の輪部、のような三日月は、赤道付近でしか見られない。抹香鯨の頭部が男性の器官に似ている、とすでに述べた。一方、抹香鯨の尾部は、新月のような三日月に似ている。三日月が豊穡の象徴である理由は、月の中に太陽が入って蝕を起こし、三日月は、男性である太陽と女性である月が交合した姿になっているからである。三日月が真横になっているように見える位置は、すでに述べたように、赤道上からのみである。その姿に抹香の尾の輪部が似ている、とまず指摘されている。

上に述べた理由によって、抹香鯨の頭部は、太陽つまり王であり、尾部は、月つまり女王である、と云える。鯨は、頭部と尾部のみがあってそれ以外の部分がないので、頭部と尾部に分けるとすれば、真二つに切るしかない、と '*Heads or Tails*' で述べられている。つまり、抹香鯨が、体の上部が男性、下部が女性、を象徴した構造になっていることになる。こうした両性具有は、古くから神聖視されてきた。神は、配偶者を必要とせず、一人ですべてを充足し生殖力をもつと考えられているからである。抹香鯨は、両性具有の姿を示していることになる。

Melvilleは、抹香鯨の半陽半陰性について、暗示にとどめながらも示している。つぎの引用文は、まず、鯨の男性的な力強さについて讃えて、つぎにそれが女性的な優しさと共存しうる、と述べている。

- ① Real strength never impairs beauty or harmony, but it often bestows it and in everything imposingly beautiful, strength has much to do with the magic.  
② Take away the tied tendons that all over seem bursting from the marble in the carved Hercules, and its charm would be gone. As devout Eckerman lifted the linen sheet from the naked corpse of Goethe, he was overwhelmed with the massive chest of the man, that seemed as a Roman triumph arch. ③ When Angelo paints even God the Father in human form, mark what robustness is there. And whatever they may reveal of the divine love in the Son, the soft, curled, hermaphroditical Italian pictures, in which his idea has been most successfully embodied, these pictures, so destitute as they are of all brawniness, hint nothing of any power, but the mere negative, feminine one of submission and endurance, which on all hands it is conceded, form the peculiar practical virtues of his teachings. (p.482)

上の引用文は、①②③の三つの部分から成る。

①は、あらゆる壮大な美において、力こそその魔術の秘密である。ヘラクレス像から、

## 『白鯨』のかくれた意味と象徴(8)

その大理石の全体にみなぎるはち切れぬばかりの腱 (tendon) をすべて取り去ると、その魅力に失せるだろう。ここまでは、男性的な力について述べている。tendonは、繊維の結合したものの、である。ということは、この語には、線条のもの (line) の絡み合ったもの、という意味から銚に付いている綱が鯨に巻き付いている状態、を連想させる。*Moby Dick*には、さまざまな象徴が織り込まれているが、その一つに、綱、紐、帯、など、lineの概念がある。これは、銚に付いた綱、鯨が案内するかのようにつくる白い道、赤道帯、黄道帯、などを象徴するものである。これは、また、仏教概念の、因と縁、のうち、縁、にあたるものを象徴している。

②の引用文には、ほかに、Eckermannの「ゲーテとの対話」(Conversations with Goethe) から引用して、ゲーテの胸が隆々としてまるでローマの凱旋門のようであった、という言及がある。この個所では、ゲーテの裸形がcorpseであること、ヘラクレス像が石でできていること、に留意する必要がある。死、と、石、は、この作品の主要なテーマである。また、ローマの凱旋門 (Roman triumphal arch)、と、ゲーテの隆々とした胸 (the massive chest of the man)、にも留意する必要がある。chestについては、Bulkingtonの胸が潜函 (cofferdom) のようである、という言及があった。Bulkingtonの肉体は海底に沈んでも彼の魂は、神格化 (apotheosis) して、海の泡からふたたび、真直ぐに起き上がる、という言及があった。chestは、coffinに相当し、死の象徴であるが、同時に、復活を約束するものである。archについても留意する必要がある。丸いもの、勝利の門、も、この作品にあらわれる主要な象徴である。

丸いもの (arch, roundness) をあらわす語には、じつにさまざまな概念が象徴されている。ETYMOLOGY(p. 5)に、この作品を解釈するにあたって鍵となる手掛りが示されている。それは、つぎのとうりである。(斜体字は作者による)

“ WHAL \* \* \* Sw, and Dw, *hval*. This animal is named from roundness or rolling, for in Dan. *hvalt* is arched or vaulted.” *Webster' s Dictionary*.

“WHALE. \* \* \* It is more immediately from the Dut, and Ger. *Wallen*. A. S. *Walw-ian*, to roll, to wallow” *Richardson's Dictionary*.

この作品では、鯨、に、もっとも大きな象徴としての意味が込められているのは言うまでもない。その、鯨、は、丸いもの (roundness)、円転するもの (to rool)、アーチ型のもの (arched)、という概念で象徴されるものである。ということが、上の引用文に示されている。archedという語には、拱廊、勝利の門、死の門、など、門、や、入口、の概念がふくまれるだろう。

### ‘The Sphynx’

第LXX章 ‘The Sphynx’は、その章名が示すように、スフィンクスの謎解きを読者に

『白鯨』のかくれた意味と象徴(8)

要求している。ギリシャのスフィンクスの言い伝えが、この章に織りこまれている。この章では、伝承のスフィンクスとMelvilleの生み出したスフィンクスが、まるで二本の糸が撚り合わさったような構造になっている。昔のスフィンクスの謎は、二種類ある。第一の謎は、よく知られているように、人間についてであり、「最初は四本足で、そのうち二本足で歩き、最後に三本足で歩くものは何か」であった。この問いで問題にされているのは、足の数である。第二の謎は、「二人の姉妹がいて、たがいに、一人が他方を生み出しているものは何か」であり、この答は、昼と夜、である。昼と夜という現象のからくりは、生から死へ、死から生への変容が行われていることである。この章で問題にされるのは、この現象の一面の、死から生への転換についてである。

つぎの文は、死から生への転換、を示唆している。

O head! thou hast seen enough to split the planets and make an infidel of Abraham, and not one syllable is thine!"

"Sail ho!" cried a triumphant voice from the main masthead.

"Aye? Well, now, that's cheering," cried Ahab, suddenly erecting himself, while whole thunder-clouds swept aside from his brow. "That lively cry upon this deadly calm might almost convert a better man. --Where away?"

"Three points on the starboard bow, sir, and fringing down her breeze to us!"

"Better and better, man. Would now St. Paul would come along that way, and to my breezelessness bring his breeze! O Nature, and O soul of man! how far beyond all utterance are your linked analogies! not the smallest stom stirs or lives on matter, but has its cunning duplicate in mind. " (p.406)

この文が、スフィンクスの謎を解く文である。

make an infidel of Abraham、Abrahamできえも不信者にかえてしまう、つまり、昼から夜にかわる、という含蓄がある。

That lively cry upon this deadly calm might almost convert a better manこの行の、lively cryとdeadly calmの、生と死、叫び声と沈黙、という意味の対比に注目すべきである。また、convert a better manは、convert a man into a better manの意味であろうが、人をよりよく変貌させる、つまり、夜が昼にかわる、という概念とつながっているのは言うまでもない。

Better and better, man.この語句がconvert a better manを際立たせているのはあきらかである。

a triumphant voice from the mastheadのtriumphant voice とlively cryは同じものであるが、mastheadは、この作品では、十字架の象徴であるのを思い出すべきである。この語句が、十字架からの復活、闇から光への転換を示唆しているのはあきらかである。

## 『白鯨』のかくれた意味と象徴(8)

to my breezelessness bring his breeze 風は、神の息吹き、ともたとえられる。この語句は、呼吸のない状態が、呼吸をする状態へ変貌するようAhabが願っているのを示している。

上の引用文で、さらに見受けられるのは、星の比喩である。

to split the planetsこれは、表層上は、不動の星辰を打砕くほどの、の意味であろうが、splitには、分割する(divide)、(たとえば昼と夜などを)、や、分配する(divide into shares)、分け前にあづからせる、などを意味する。微風に乗ってSt.Paulが生命をもたらせに近づいて来るのをAhabが願うのと、split the planetsは結びついていないことはない。聖者は星に常住すると云われており、それぞれの惑星を、独自の徳性が、たとえば、金星は愛、などが支配すると云われているからである。

“Three points on the starboard bow, sir, and bringing down her breeze to us!” このthree pointsは、角度としてはなんら重要ではなく、三という数字に象徴としての意味をもっている。三という数字は、神聖な天上、の象徴である。またPequod号でなにか天の配慮ともいふべき奇跡が起るときには、それは、右舷側starboardからあらわれる。starboardという語は、象徴として使われている。starboard=star+boardship このように理解すると、Pequod号は、前方の風上からきた星の船に出会うことになる。その船が、死のような風(deadly calm)の中にいるPequod号に生気の微風を運んできていることになる。‘The Sphynx’のつぎの第LXX I章で、砕けた星屑の一つのような船が運んできたのが、infidelのような使者Gabrielと、新鮮とはおよそかけはなれたJereboam号の空気がとである、というのはまったくアイロニーではあるが、Jereboam号事件にかぎらず、この作品の他の悲哀にみたち事件は、アイロニーなどといった短絡な解釈をはねつけるものがある。楽しい事件も悲しい事件も強い必然の糸で燃り合せられ、そこには善意の深い意味がかくされているのがかいま見える。雷雲がAhabの額から吹き払われるのは、Ahabがスフィンクスの謎を解いたからであろうが、この語句も、風、や、凧、や、雲、など、移り変わり、変貌、といった一連の比喩に属している。Pequod号は、風上の方、嵐の方、へ向っていることになっている。それは、太陽の住居と考えられている東の方である。ヨブ記では、つむじ風の中から神が顕現されるが、Ahabの額に渦巻く雷雲は、神の住居と感応しうる表象として理解すべきだろう。

whole thunder-clouds swept aside from his brow

O Nature, O soul of man! how far beyond all utterance are your linked analogies! not a smallest atom stirs of lives on matter, but its cunning duplicates in mind.”

ここには、物質の現象、と、具象性をもたぬ精神の姿、とは、たがいに感応しうる、という超絶主義の思想がある。しかし、Ahabは何を指して、自然と人の心は言葉であらわ

せないほどよく似ており、物質のどんな微小な原子の動きも人の心と生き写しである、と云ったのだろうか。soul of manはAhabの心であるのはいうまでもない。それでは、NatureはどのようにAhabの心を映したのであろうか。この章の顕著な自然の姿とは、

it was noon, silence reigned over the before tumultuous but now deserted deck. An intense copper calm, like a universal yellow lotus, was more and more unfolding its noiseless measureless leaves upon the sea. (p.405)

時は正午で、甲板には人もなく、沈黙が支配していた。宇宙に広がる黄色い蓮華のように銅色に静寂が輝く。

### ‘The Sermon’

‘The Sermon’は、*Moby-Dick*の第IX章である。なぜMelvilleは章数を表わすためにローマ数字をもちいたのか、これには理由があった。アラビア数字は、数値(numerical value)をあらわすことはできる。しかしローマ数字は、もっとさまざまな複雑な表現ができる。ローマ数字は、象徴として、あるいは、符号として、もちいることができる。たとえば、第9章は、ローマ数字ではIXと綴られて、IXは、文字としてあるいは記号として、数字以外の意味を内包しうる。名前の頭文字も組み合わせた組合せ文字(monogram)として、ローマ数字は使用することができる。

ギリシャ字のChristのはじめの二字XPを組合せたChristian monographは、古くから知られている。Jesus Christのギリシャ語の頭文字は、IXと綴られて、これもモノグラムとして使われてきた。*Moby-Dick*の第IX章は、したがって、イエス・キリストの紋章記号とも言うべき数値が章数として冠せられていることになる。

*Moby-Dick*の章数は、こうした隠し文字としての意味を秘めている。アラビア数字では、このような使い方はできない。第IX章 ‘The Sermon’では、キリストについて説かれていることになる。Father Mappleが説くヨナの魚は、キリストにほかならない。

Father Mappleは、ヨナの寓話はstranded storyである、と言う。またFather Mappleは、ヨナの寓話は四つのyarnからできている、と言う。たしかにヨナ書は、四章からできており、聖書の中のもっとも短い章である。Yarnの語には、物語、と、織物の糸、という意味があるので、Father Mappleが云うとうり、ヨナ書が、四つのchapter、つまり、四つのyarnからできていると云うことができる。yarnという語には、二種類の違った意味が分ちがたく撚り合わせられているstrandedということにもなる。また、ヨナ書は、四つの章が四本の糸のように撚り合わせられて一本の綱として構成されていることになる。四本の糸の撚り合わせ方は、まず、二本の糸(yarn)を撚り合わせる(strand, v.)、それから残った他の二本の糸を撚り合わせる。そのようにしてできたそれぞれ二本の撚糸(strands, n.)をさらに撚り合わせて、一つのstranded storyを作る、というふう

になっている。Father Mappleの説教も、すでに述べたように、四本のyarnを燃合わせて構成されているのは云うまでもない。説教の前半の二本のyarnはヨナの話であって、それは、下降の話、つまり下降の糸、と上昇の話、つまり上昇の糸、でできている。説教のうち、後半の二本のyarnは、キリスト者としてのFather Mapple自身に関わるものである。Father Mappleの二本のyarnとは、端的には、彼の名が示すように、古いappleの樹の切株という一本のyarnに新しいmapleというもう一つのyarnを接木して、それが第二の春を謳歌して聳えている姿を云うのであり、いわば彼の二本のyarnが一つのstranded storyをつくっている。ヨナのstranded storyとFather Mappleのstranded storyが燃り合せられて、さらに強固な一つのstranded storyをつくっている。四本のyarnは、たがいには有機的に絡み合って、もっとも簡潔に、もっとも力強く、キリスト教の本質を説いている。

同様のことが、章数と章題についても言える。章題と、象形文字として、あるいは、象徴言語としてもちいられている章数とは、二つのyarnがstrandedされた、という手法によって、たがいにはからみ合い、意味を補強し合っているのがわかる。yarn(糸、話)という語に二つの異なった意味がふくまれていたように、strandも二つの異なった意味をもっている。それは、燃合せる、と、浜辺に打ち上げる(a stranded whale in Spain p.7)である。strandには、ほかに、立ち往生させる、行詰まる、という意味があって、読者が解釈に行詰まる、意味をはかりかねて立ち往生する、などのかくれた意味があるだろう。*Moby-Dick*という作品は、つねに二つの対立概念を提示し続け、最後にそれらの対立概念が融合する、つまり二種類のyarnが絡み合うstrandedというパターンでもって終わっている。それらの対立概念とは、天と地、上と下、明と暗、太陽と月、金と銀、男性と女性、霊と肉、善と悪、など、あらゆるものを含んでいる。それらは、輪廻し、永遠に輪の中を動いているのも事実だが、段階を追って進んで行けば、機が熟して、一つに融合する瞬間がある。その瞬間をとらえると、解脱を得て、永遠の生命に入ることができる、というのが*Moby-Dick*のテーマである。Ishmaelは、膨大な紙数の象徴を使って、このテーマとその解決方法について述べている。MelvilleおよびIshmaelは、あくまでも象徴言語をもちいて語っているのであり、常套の直接言語で語っているのではけっしてない。

### ‘ETYMOLOGY’

‘ETYMOLOGY’(p.5)では、鯨の語源を書いた文字の柱と、それぞれの国語名を書いた文字の柱とが、二本並んで立っているかたちになっている。これらの二本の柱は、いわば、二頭のスフィンクスが左右に並んで守っている入口の門柱のように見える。二本の柱が、スフィンクスの謎を示している。スフィンクスは、沈黙したまま不動の姿勢を

保っている。しかしスフィンクスは、体でもって謎を語り、そしてその解釈を求めている。この二本の柱の謎が解けなければ、*Moby-Dick*という作品がなにを語ろうとしているかが解けない。これらの文字でできた二本の柱は、*Moby-Dick*の世界に入っていくための入口である。

二頭のスフィンクスは、目を閉じたまま、たがいに他方の目と対峙しあっている。スフィンクスが目を開けて、たがいに見つめあって視線をかわすとき、スフィンクスが守っている門が開く、といわれている。その瞬間をとらえて、人は門を通過することができる、といわれている。‘*ETYMOLOGY*’にはまた、鯨が何であるかを人に教え導くときに、その綴りから、うかつにも、Hの字を省くようなことがあれば、いつわりを教えることになる、という警告がある。それはつぎのとうりの文である。

“ While you take in hand to school others, and to teach them by what name a whale-fish is to be called in our tongue, leaving out, through ignorance, the letter H, which almost alone maketh up the signification of the word, you deliver that which is not true. (p.5)

ここでは、Hの文字にこそもっとも重要な意義がある、と述べられている。同じ‘*ETYMOLOGY*’に示されているすでに述べた二本の柱は、スフィンクスの視線がかよいつたとき、二本の柱はつながって、Hの文字が出来上がる。Hの文字にもっとも重要な意義がある、というのは二本の柱が繋がったときにできるHに言及している、と考えるべきだろう。Hという文字がなにを象徴しているかを知らなければ、この作品が理解できない、ということ‘*ETYMOLOGY*’は警告しているのである。同時にまた、解釈の手掛りを示しているのである。つぎの、鯨についての説明も、解釈の手掛りを示している。

“ WHALE. \* \* \* Sw. and Dan. *hval*. This animal is named from roundness or rolling, for in Dan. *hvalt* is arched or vaulted. ” *Websters’ Dictionary*.

“WHALE. \* \* \* It is more immediately from the Dut. and Ger. *Wallen*, A. S. *Walw-ian*, to roll, to wallow. *Richardson’s Dictionary*.

引用文では、鯨を説明して、roundness, rolling, arched, wallow, がその特徴である、と述べている。以上の三種類の、いわば、スフィンクスの謎が*Moby-Dick*という作品の入口に置かれていることになる。

まず、roundnessがなぜ鯨を形容していることになるのだろうか。おそらく、鯨は、水面を泳いでいるとき、真上から眺めると丸いので、roundnessといったのだろう。そればかりでなく、白い鯨が青い海の上を丸く背中を見せながら泳いでいる姿は、青空を渡る太陽に似ているだろう。rollingやarchedは、太陽が黄道を進むさまをおもわせる。wallowは、のたうつ (roll about)、波打つ (surge)、汐がほとばしる (gush forth)、吹き出

## 『白鯨』のかくれた意味と象徴(8)

る、渦を巻く (eddy) など、鯨の形容詞であるばかりでなく、海の姿を形容している。これらの形容語は、鯨が、大空の太陽、や、大洋、の象徴でありうることを示唆している。また、太陽が海上に繰りひろげる春夏秋冬の自然現象と、鯨がどのように関わり何を表現しているか、をも眺めていく必要があるのを示唆している。*Moby-Dick*では、鯨自体がスフィンクスである。スフィンクスが旅人に課したと云われる謎は、四季の移り変わりや時の流れに関するものであった。また、丸いものroundnessは、Oの文字をもって図像化できるものであり、Hの文字とともに、*Moby-Dick*の世界観の重要な象徴を荷っている。

上に挙げた引用文の鯨の説明にあたって、WHALEが大文字で綴られている。大文字で綴られないと、二本の柱が真中で結ばれているさまがイメージ化されないからだろう。また、古くから神の名を文字で表わす試みがあったが、そのさいは大文字で綴られるのがつねであったから、それをまねたのだろう。WHALEに三点の星印がついているが、これは、3という数が神性を表わすと考えられているので、特別の注意を払うよう促してMelvilleが付けたものだろう。

‘ETYMOLOGY’には、鯨を表わす語として、NUE-NUEという綴りがある。これは、方角を示す羅牌の文字をもじったものかもしれない。羅牌は三十二等分されており、文字盤のそれぞれの文字は、つぎの三十二方位をさしている。N, NbE, NNE, NEbN, NE, NEbE, ENE, EbNiE, EbS, ESE, SEbE, SE, SEbS, SSE, SbE, SbEiS, SbW, SWbS, SW, SWbW, WSW, WbS, W, WbN, WNW, NWbW, NW, NWbN, このうちNEbEがNUE-NUEに似ているようである。しかし、NUE-NUEが方向を示していると仮定して、その方向は、以上の三十二方向の中にはないだろう。あえてあるとすれば、それは、東、新しくorientateされた東、太陽の昇る方向、NEW EAST, であろうか。*Moby-Dick*という作品の秘密は、文字でできた二本の柱からなる門から入り、正しい方向にむかうのでなければ解くことができない。また、太陽の昇る方向、に注目しなければ、*Moby-Dick*という作品は解釈できない。

### ‘The Spouter-Inn’

第III章でQueequegがはじめて登場する。この章には、Queequegがどういう人物であるか、どういう創世神話から原型を借りたのか、についての言及がある。まず、Queequegは、A peddler of heads (p. 49)、首売り商人、であると紹介される。また、つぎの文では、Queequegは、銀貨三十枚ほどを袋から取り出し、二等分してIshmaelに与える。これらのことから、商業と金銭の守護神であるヘルメスがQueequegの人物像の根底に取り入れられているのが示唆される。

[He] took out his enormous tabacco wallet, and groping under the tabacco, drew out some thirty dollars in silver, then spreading them on the table, and mechanically dividing them into two equal portions, pushed one of them towards me, and said it was mine. (p. 85)

‘The Counterpane’

第III章に続いて第IV章でも、Queequegが性格原型をヘルメス神から得ているのが、明らかである。Ishmaelは、Queequegの朝の着替えの様子をつぶさに描写している。

① He commenced dressing at top by donning his beaver hat, a very tall one, by the by and then—still minus his trowsers he hunted up his boots. What under the heavens he did it for, I cannot tell, but his next movement was to crush himself—boots in hand, and hat on—under the bed, when, from sundry violent gaspings and strainings, I inferred he was hard at work booting himself, though by no law of propriety that I ever heard of, is any man required to be private when putting on his boots, (p. 55)

② getting under the bed to put them on. At last, he emerged with his hat very much dented and crushed down over his eyes, and began creaking and limping about the room, as if, not being much accustomed to boots, his pain of damp, wrinkled cowhide ones—probably not made to order either—rather pinched and tormented him at the first go off of a bitter cold morning. (p.55-6)

③ The rest of his toilet was soon achieved, and he proudly marched out of the room, wrapped up in his great pilot monkey jacket, and sporting his harpoon like a marshal’s baton.(p.56)

①では、Queequegは、たいそう背の高い山高帽をかぶる。かぶる、は、don、という語が当てられている。donには、別義として、*Sp. master, lord*の意がある。Queequegは、長靴を取り出し、手に持って、帽子をかぶったまま、ほとんど下着もつけず、ベッドの下にもぐりこむ。そこでQueequegはひと苦労しながら靴をはくのだが、彼はなまじ礼儀をわきまえていたからそうした、というのではない。Queequegは、そうすることによって、彼自身ヘルメス神になって生まれ替る儀式を行っている、というべきだろう。ヘルメスは、翼の生えた帽子と靴によって知られているからである。to crush himself under the bedは、命を断つ、という意味だろう。

sundry violent gaspings and strainings は、胎内から生れ出るときの姿をまねているのだろう。Queequegは、以下の儀式的な行為によって、ヘルメス神となって復活したことになるのだろう。①の文の、hunted up his boots,から、Queequegは、彼の所持品入れ

の中を探して靴を取り出したのがわかる。

②の文では、Queequegは、ベッドの下から出てきたとき、帽子を目深かにかぶり、びっこをひいて歩く。これは、まだ見ぬAhabの姿である。he began creaking and limping about the roomでは、靴が新しいので、ぎゅうぎゅう鳴るのだろう。limpingは、びっこをひいて歩く、as if, not being much accustomed to boots今まで長靴をはき慣れていないかのように、pinched and tormented him at the first go offはじめて履くので窮屈だったかのように、など、靴が新品であったかのように示されており、靴をはくことの儀式的な意義が明らかである。

③ he proudly marched out of the room 靴は、はきごちがよく、彼にぴったりだったのだろう。sporting his harpoon like a marshal's baton 銛を錫状のように振りまわして、は、いうまでもなく、ヘルメスの二匹の蛇のからんだ杖をまねている。pilot monkey jacket ヘルメス像は、マントのような衣をなびかせ、さっとうと風を切っている姿でえがかれている。pilot monkey jacketは、ヘルメスがPequod号を先導しているかのように、重要な瞬間には風向きがかわって、良い方向に局面が進展するばあいが多いのを示唆している。Pequod号は風によって導かれている、といってもよい。ヘルメスは、そのattributeが風である、とされている。ホーソンの、子供のために書かれた物語では、どの物語もヘルメスによって助けられる設定になっている。Melvilleがホーソンのえがいたヘルメスを意識しなかったとは考えられない。ヘルメスとQueequegがたがいにcountepartになっているのは否定できない。章題の‘*The Counterpane*’は、たがいにduplicate、という意味になっている。

### ‘Loomings’

つぎの文には、かくれた意味がある。

With a philosophical flourish Cato throws himself upon his sword, I quietly take to the ship. There is nothing surprising in this. If they but knew it, almost all men in their degree, some time or other, cherish very nearly the same feelings towards the ocean with me. (p.23)

まず、Catoが剣の上に身を投げる、というのは、つぎのように解釈できる。Catoの頭文字のCだけを取り出して、いわば象形文字と考えて、紙の上にCを下に向けて書いてみよう。その下へ、剣のかたちをした文字Iを書いてみると、この図は、Catoが剣にむかって身を投げる姿を記号化したものである。あるいは、Cを女性、Iを男性、としてとらえると、これは、男女の原理の、もっとも簡略な図形をあらわす。Ishmaelは、わたしはそっと船に乗る、という。この文を図にしてみよう。Cは、上向きに書くと、船のかたちをしている。Iは、剣のかたちをしている。この図は、Catoのばあいの逆向きになって、C

## 『白鯨』のかくれた意味と象徴(8)

が下に、Iが上になる。IshmaelがI take to the shipというのは、男女の交わりをする、ことを意味している。このことは分かってみれば何も驚くにはあたらない、とIshmaelが云う。男であれば海にたいして誰しもそういう気持ちになる、とIshmaelはいう。海 the oceanは、seaであるが、同時に発音上は、Cであり、女性を象形化している。Ishmaelがいう、men、は、男たち、という意味で、女性はふくまれていない。男であれば、程度の差こそあれ、誰しも男女の交わりを欲する、とIshmaelは云っていることになる。上の引用文中の、With philosophical flourishは、哲学的な美辞麗句を並べて、というより、むしろ、哲理にかなって豊穣をもたらしながら、といった意味になるだろう。Ishmaelという名自体がissue+maleであるから、Ishmaelは、男性原理、と、豊穣、を意味する象徴概念である。

### “Chowder”

Nantucketに着いたのは夜遅くであったから、その日のうちにしなければならない仕事は食事とベッドについてである、とIshmaelはいう。

It was quite late in the evening when...Queequeg and I went ashore, so we could attend no business that day, at least none but a supper and a bed. (p.99)

Try-potsの亭主の名前Hoseaが「ホセア書」から引かれたものである、ということについては、すでに述べた。宿のおかみさんは、黄色い服を着ており、髪の色も黄色である。顔には一面にそばかすがある。戸口でおかみさんから返事をもらうのを待っている男は紫色の羊毛の服を着ている。これは、「ホセア書」(2:8)のcorn and wineとwool and flayから来ているだろう。cornは黄色、wineは紫色をしている。cornは、古くは、小麦wheatを指しているので、corn and wineは、聖体拝領の、パンとブドウ酒、の意があるだろう。wool and flayは、毛布や掛布など、ベッドを暗に示している。パンとブドウ酒は、なによりも、まず、キリストの最後の晩餐を思い起こさせる。最後の晩餐に関連する、ベッド、はと云えば、それは、十字架上の死のあとの、復活までの期間をさしているだろう。要するに、Ishmaelが、しなければならない用件businessは、食事とベッドである、というとき、そこには、死と復活、が示唆されていることになる。このことから、Pequod号の最後が暗示されていることになる。Pequod号が沈まなければならないことと、同時に、Pequod号がふたたび復活するであろうことが、暗示されている。ギリシャの昔のアルゴ船が、南半球の夜空で、船座、として復活し、かの地の南天で、北斗七星さながらに、けっして沈むことがないように、Pequod号も復活するだろうことが暗示されている。夜空を渡る三日月は船さながらであり、そこに永遠のPequodの姿がとどめられていると言えなくもない。Pequodという名は、豆のさや (Pea+cod; pea+pod)、を意味している。三日月も、豊穣の象徴である。Melvilleは、*Moby-Dick*の中で、

## 『白鯨』のかくれた意味と象徴(8)

Cape Hornについてたびたび言及している。Hornは、豊穡のつ<sup>く</sup>のcornucopiaを意味し、三日月の姿をあらわしている。Pequod号が、豊穡の象徴であるのは云うまでもない。

Try-Potsを訪ね当てるに際して、黄色い倉庫 (a yellow warehouse p.99) から出発し、白い教会 (a white church p.99) を経て行くように、とPeter CoffinはIshmaelとQueequegに指示をした。黄色い倉庫には小麦が入っていて、Ishmaelの云う、食事、が、黄色い倉庫、と結びつく。白い教会、は、復活を待ち望むための、黄泉の世界のベッドである。黄色は、実った麦畑の色、あるいは、太陽の光の色、黄金の色、などを表わすだろう。Hosea Husseyのおかみさんの顔一面のそばかすは、麦の粒を散らせたさまであるだろう。おかみさんの黄色の服と黄色の髪の毛は、彼女が「ホセア書」のHoseaの妻のように欲情の女であることを示しているが、同時に、彼女が豊穡をもたらす多産の女であるかのようなようである。

### ‘Queen Mab’

第XXVI章は、Melvilleが、フロイトの、夢の解釈、や、宇宙自然の中の事物のもつ象徴として意味、などの説にさきがけて、夢や想念のもつ意義を追求しようとしたということを示す章である。あるいは、むしろ、この作品が、神話や伝説などの、古代から人間がはぐくんできた夢の世界を集大成したものであることを、この章は示している。

Queen Mabは、象牙の塔に住み、人の夢の仲介をすると伝えられる妖精の女王の名である。Ishmaelは、Ahabの鯨骨の足を象牙の足 (ivory leg) と呼んでいる。Ahabにとって、彼の象牙の足は夢の源泉であって、彼の体の他のどの部分よりも彼の本質に近い。彼の‘Chase-the Second Day’の中のつぎの引用文にそれが示されている。

But even with a broken bone, old Ahab is untouched, and I account no living bone of mine one jot more mine than this dead one that's lost. No white whale, nor man, nor fiend, can so much as graze old Ahab in his own proper and inaccessible being.(p.705)

ということは、Ahabにとって、彼の鯨骨の足は、象牙の塔、としての意味をもつ。

StubbはFlaskに、じつにくだらぬごとく思われる夢の話をする。どんな夢解きをすればよいのだろう。最初の一蹴りでStubbの足は、すっぽ抜けてしまう。そのあと、一本足で立ったまま足蹴りを続けるわけにはいかないだろうが、ともかく彼は蹴りつづける。抜けた足は、Ahabが片足を取られるのを意味する。Ahabの足が鯨の腹の中にとどまると同様に、Stubbの足は、夢の中の白鯨めく海坊主の尻にくっついたままである。Stubbという名は、切株のようなAhabの足が、いわば、鯨に接木されたかたちになっているのを示している。Stubbがさらに海坊主を蹴りつづけることによって、海坊主から逆さに突き出ている多くの銚 (marlinspike) の一本にStubbの足が刺さるだろうと想像でき

### 『白鯨』のかくれた意味と象徴(8)

る。そうなることによって、人と鯨が、たがいに他方の骨の一部分を共有することになる。そうして、人と鯨が、いわば、因と縁、によって結ばれたことになる。‘Queen Mab’の章のはじめに、StubbはFlaskに、真束君 (King-Post)、と呼びかけている。それは、Flaskが背が低いことと、同時に、彼が、短い柱、つまり、Ahabの鯨骨の脚、を象徴していることになる。

#### “The Whale Watch”

この章では、拝火教徒のParseeがAhabの最後について予言する。この日、Pequod号は四頭の鯨を仕止める。その四頭が仕止められた位置は、それぞれ、Pequod号の、風上と風下、そして、船首と船尾、の方向である。Pequod号は、四方を仕止め鯨によって囲まれたかたちになる。あるいは、いいかえると、Pequod号は、風上と風下、と、船首と船尾、の方向の、相対しあう鯨をつないでできる十字形の中心に位置していることになる。Ahabのボートは、遠く離れた風上の鯨を追っていたために、その鯨のもとで夜を明かさなければならなかった。Moby-Dickでは、さまざまな自然の事物によってかたちづくられる十字形について言及されるが、この章で見られる十字形と同じ種類の十字形が、‘Chase-The Third Day’でも、問題にされている。これらの十字形は、いわば座標軸ともいうべき両軸の、片方の軸が風によって構成されているのが特徴である。

#### “Loomings”

Ishmaelは言う。

With a philosophical flourish Cato throws himself; I quietly take to the ship  
(p.23)

この引用文の意味は、つぎのように理解できないだろうか。今仮に、Catoの頭文字Cを、Cato自身を表わす(stand for)ものと喩えて、また、his swordを仮に、Iという文字でもって表示してみると、Cの文字が真上からIの文字におおいかぶさるような恰好に、上の文は、図示されることになる。つまり、Cato throws himself upon his swordは、IとCとして記号で示されることになる。この言い表わし方は、つぎのI quietly take to the shipの表面下の意味を暗に説明していることになる。その理由は、つぎのとうりである。この“Loomings”の章で、Ishmaelは、何度も繰り返し、I go to seaという。

Now, when I say I am in the habit of going to sea (p.26)

no, when I go to sea (p.27)

Again, I always go to sea (p.28)

Finally, I always go to sea (p.28)

これからは、Ishmaelが海へ出かけていく理由を、それぞれの書き出し文によって説明し

## 『白鯨』のかくれた意味と象徴(8)

ているのはいうまでもない。しかし、それ以外に、I go to seaという文には、I→C、という記号化された図形がかくされているのが感じられる。Cato throws himselfは、I go to seaがI go to Cとなり、つまりは、I→Cと書き示すことができるということのヒント (clue) になっていると考えられる。これについてはすでに述べた。

それでは、I→Cはなにの表象 (sign) になっているのだろうか。上の引用文の、With a philosophical flourishが、その説明をしている。この語句の意味は、形而上の豊かさをともなって (with a metaphysical abundance)、あるいは、文意を抽象して図像的意匠で表現してみると、といった意味になる。flourishには、剣などを急速に振り回して、といった意味がある。ということは、I→Cという記号には、交接、の意味があることになる。しかしphilosophicalという形容詞が付いているのだからI→Cは、性衝動の図式化されたものにとどまらないだろう。

わたしが海の中に入っていく、は、さまざまに解釈できる。突極的には、わたしが海の中に沈んであの世に行ってしまう、を意味している。そうすることが思索上理性にかなっており豊かな実りをもたらす、という意味に上の引用文は解釈できることになる。これが第I章“Loomings”の主題である。同時にこれがMoby-Dickの主題である。死の中に豊かな実りがある、という考え方は、ギリシャのオルフェ神話にもとずいている。オルフェ神話(the Myth of Orpheus)は、ナルシスの変身譚(Metamorphosis of Narcissus)と結びついており、また、キリスト像の原型であるといわれている。

水面に映る姿とは、鏡に映る自分自身の魂の姿である。人は、心の中の鏡に自己同一性の映像を見る。Melvilleの言うphantom of lifeを人は自身の心の中に見る。海や湖沼の水面は、phantom of lifeを映し出す魔法の鏡 (magic glass p.684) である。人の瞳もまた魔法の鏡となる。眺める人のphantom of lifeが、眺められる人の瞳に映し出される。眺める人が、自分のphantom of lifeとして、永遠の生命を、鏡の中に映し出すとき、その人は、鏡に映る自分のidentityを愛し、その中に溶けこんでいくことを願う。一体になりたい衝動にかられるのは当然であるし、また、心のまなこでとらえた映像の中に飛びこんで行く以外に、人は、phantom of lifeをとらえることはできない。人は、理想像を描き、その像のために命を捧げる。Ahabは、彼の鏡に映るphantom of lifeを求めて突進し、そのphantom of lifeの中に自己を同化させることができた。彼は、思いを遂げ、海という鏡の中に消えていく。Ahabは、彼のエウリディケであるところの自己の魂を恋して冥府に下ったオルフェでありナルシスである。

Ishmaelは、“Loomings”の章で、彼の鏡に映る風景を描写する。Loomingsという章題は、Ishmaelの心の鏡の中に、さまざまな風景とともに、生命の本質であるphantom of lifeが映し出されるさまを云ったものである。鏡の中で、巨大な水門が開かれて、生命の幻がその壮麗な姿を現わす。その姿は、白衣をまもって光り輝く変容のキリストさなが

## 『白鯨』のかくれた意味と象徴(8)

らである。このとき溢れ出た水門の水は、Ahabとその一行の者たちが、最後に飲むことになる海の水である。海は、満面に水をたたえた聖杯に変容し、Ahabたちを、この杯から飲むように、と招く。この杯から飲む者は、キリストのように変容し、死んでも死なない、というのが、キリストの歌う甘美な歌であるが、Ishmaelも、キリストと同様に、また、オルフェと同様に、人の魂を蕩かす甘美な歌をうたっている。Ishmaelもまた、オルフェであり、ナルシスである。その歌は、死への誘いである。死んでも死なない、という死への誘いである。Ishmaelという名がissue+maleであることから明らかのように、Ishmaelとは、生命の根源、という意味をあらわす抽象概念である。Ishmaelとは、限りなく生命を発生させる宇宙のリビドー (universal libido) である。抹香鯨の形状とその勇壮な潮吹きが宇宙の性衝撃を表現しているように、Ishmaelという名も、生命、の象徴である。ちなみに、*Moby-Dick*という名は、躍動する phalus、を表わしている。moby < mobile; dick < phalusであるのは明らかである。しかし、Ishmaelが説く生命は、Orpheus-Christが説く生命と同様、死の中に存在する。

Melvilleは、*Moby-Dick*の中で、自然をつぎのようにとらえている。

O Nature, and O soul of man! how far beyond all utterance are your linked analogies! not the smallest atom stirs or lives on matter, but has its cunning duplicate in mind.(p.406)

(おお自然よ！おお人の心霊よ！言葉にはとてもいいあわせないほど、まるでよく似たものだ。物質のどんな微小な原子一つの動きも生命も微妙に憎いほどに、心の中のことを生き写しにしている。) (阿部)

人間の心の動きと自然の現象とが生き写しduplicateになっている、というのが、*Moby-Dick*の中の自然の促え方である。これは、Emersonが説く自然観と同じである。Melvilleがどのようにその自然観を作品の中に組み入れていったかについて*Moby-Dick*を中心に以下たどっていく。*Moby-Dick*の中では、自然は、大きくは、まず、季節の移り変わりの現象としてとらえられている。つぎには、自然は、特殊な現象を起こすことがあるもの、としてとらえられている。つづいて、季節に関係なく日常ありふれて存在する風景の中の自然の事物が、作品の中で重要な鍵となるように仕組まれている。

まず、季節の移り変わりについて、(*Moby-Dick*が発表された1851年までの、ソーローの日記の中で春夏秋冬の区分がどのように認識されているかについて調べてみたが、ソーローは、この点について厳密には意識していないようである) 冬至に当るクリスマスの日と、夏至のmidsummerの日、そして春分と秋分の日、季節を区分する日である。(ソーローの日記には、とくにこれらの日についての記載は見当たらない。) *Moby-Dick*の中では、これらの日は、いわば、特別の日として聖別されている。クリスマスの日朝、Pequod号は出発する。Pequod号の旅の終わりは、秋分点である。つまり、日付変更線が

赤道と交わる地点である。ここはまた、黄道との交点でもある。夏至と春分は、それぞれ0°と90°の経線上を黄道が横切る日であるが、そのときPequod号には何が起こったか。

### ‘Quarter-Deck’

第XXXVI章の‘Quarter Deck’では、春分の日が起こった事件について述べている。この日にはじめてAhabは、船員たちにMoby Dickについて説明し、Moby Dickを追う決意を告げる。この日には昼夜が平分される。この日には、太陽の黄道が天の地平線の上に顔を出す。この日にはじめてMoby Dickという名が口に出され、その存在についての認識が乗組みの心に植えつけられ、一日一日とその認識が大きく育っていく。それはちょうど、一日一日と太陽が勢いを増していくのと軌を一にしている。またこの日には、太陽の象徴のようなdoubloon金貨がPequod号の大<sup>メインマスト</sup>櫓に釘付けされる。その姿はまた、キリストの磔刑像に似ている。大櫓のdoubloon金貨は、春分の日<sup>の</sup>太陽がもたらす自然現象とduplicateになっている。

‘Quarter-Deck’のすぐ前の章の‘The Mast-Head’の中につぎのような文がある。

①And perhaps, at mid-day, in the fairest weather, with one half-throated shriek you drop through that transparent air into the summer sea, no more to rise for ever. Heed it well, ye pantheist! (p.215)

この文のat mid-day と the fairest weather と the summer sea. から、この日が、太陽に喩えられたキリストが復活するEasterの日であろうことが、また、南下しているPequod号が南の海にあって、今、正午頃であるのがわかる。

また、‘The Quarter-Deck’ のつぎの章の‘Sunset’ の中につぎのような文がある。

②Yonder, by the ever-brimming goblet’s rim, the warm waves flush like wine. The gold brow plumbs the blue. The diver sun—slow dived from noon, —goes down, my soul mounts up! (p. 225)

(彼方の、<sup>とこしえ</sup>永久に満々たる大盃のふちに、暖い波はぶどう酒のように染まっている。黄金の額は青い海に垂直に光を投げている。水に潜ろうとする太陽、—真昼から潜りはじめて、今沈んでいく。)(阿部

この文の、太陽の光線が垂直に海上を照すThe gold brow plumbs the blue. というのは、太陽が正しく東から出て正しく西に入る春分あるいは秋分の日<sup>の</sup>正午にPequod号が赤道上に位置していることを意味している。Pequod号は出発してからまだあまり日数が経っていないので、この日は春分であったと考えられる。この日には、太陽は、正しく東西に移動し、また正午には正しく真上から光を投げかけて、一日がかりで、いわば、大きな光の十字架を形づくる。円形<sup>の</sup>地平線で囲まれた大盃の中に満たされた海水は、夕陽に照らされてワイン色に輝く。太陽がつくる光の十字架と、帆柱に輝くdoubloon金貨が、二重映しになっているのは言うまでもなく、また、大盃の中のワイン色の海は、

## 『白鯨』のかくれた意味と象徴(8)

この日の落日のあと、Pequod号がMoby Dickの追跡を誓う儀式のために使われた三人の銛打ちの血と、その日の酒宴でふるまわれたワインとともに、二重、三重のduplicateになっている。この、二重映し、という行為は、じつは、儀式の本質である。春分の日にはAhabが太陽を観照して行った儀式は、秋分の日には、ふたたび太陽がつくった光の十字架とともに、またこの日に海に沈み始める黄道のあとを追って、Pequod号が沈んでいくのと、二重映しになっている。Moby-Dickという作品は、太陽の運行や季節の移り変わり、などの自然現象が大きな比重を占める作品である。夏至の日を象徴する行為については、第LXXXVII章‘The Grand Armada’ と第LXXXVIII章‘Schools and School Masters’ で論じられている。

章題のQuarter-deckという語は、一年の四分の一、つまり、四季を表わすquarter、と、循環 loop、の意をふくんでいるdeckとからできている。Quarter-deckには、後甲板、という表の意味と、四季の循環、という裏の意味とを含んでいる。

Moby-Dickには特殊な自然現象が見られる、とすでに述べたが、それは、一つには、Mapple神父の説教壇のうしろに飾られた絵画である。

Between the marble cenotaphs on either hand of the pulpit the wall which formed its back was adorned with a large painting a gallant ship beating against terrible storm off a lee coast of black rocks and snowy breakers. But high above the flying scud and dark-rolling clouds, there floated a little isle of sunliht, from which beamed forth an angel’s face, and this bright face shed a distinct spot of radiance upon the ships tossed deck, ... “ Ah, noble ship, ” the angel seemed to say, “ beat on, beat on, thou noble ship, and bear a hardy helm, for lo! the sun is breaking through, the clouds are rolling off—serenest azure is at hand.” (p.69)

(「説教壇のうしろの、左右の大理石の碑の間の壁面には、一枚の大きな絵画が黒い岩と雪のように白く砕ける荒波との岸に吹きつけられようとしながら進んでいる雄々しい船の図をあらわしている。しかし、飛び散る飛沫と黒々と渦巻く雲の上高く、小さな一つの島のように、陽の光のただよところがある。そこから輝く天使の顔がのぞき、その光る顔は、スポットライトのように鮮かな丸い光を船の上に投げかけている。「ああ、勇ましい船よ。進め、進め、たくましく舵を損れ。見よ！太陽は雲間を破った、叢雲は渦巻きながら去る、…この上もない静かな晴天は近づく」(阿部)

この絵に画かれているのは、台風之眼である。それが今、船の上を通過しようとしているところである。台風之眼を見ることができるとは、多くても一生に一度くらいである。そんなまれな現象が、この絵の中にとらえられている。あたり一面の嵐の中に大きな円盤のような空間が現われ、ぽっかりと青空が浮かぶ。その中に真昼の太陽が輝いている。その空間が通り過ぎてしまうには数分もかからない。ヨブ記の中で、神はつむじ風の中

## 『白鯨』のかくれた意味と象徴(8)

から現われて、ヨブに語りかけられるが、そのときのつむじ風は、この絵の中に描かれているのと同じように、ぐるぐる回る台風の目であっただろう。Melvilleは台風の目を神の眼まなこの象徴としてとらえていると考えるべきだろう。

また、自然界で例外的に現われるものとして、白い動物がある。第XLII章の‘*Whiteness of the Whale*’は、白い色が何を象徴するかについて、Melvilleの意見を披露している。さまざまな検討が加えられて、自然の美しい粧まいと、結局、つぎのようなものである、とIshmaelつまりMelvilleは嘆じている。

①And when we consider that other theory of the natural philosophers, that all other earthly hues—every stately or lovely enblazoning—the sweet tinges of sunset skies and woods, yea, and the gilded velvets of butterflies, and the butterfly cheeks of young girls, all these are but subtile deceits, not actually inherent in substance, but only laid on from without, so that all deified Nature absolutely paints like the harlot, whose allurements cover nothing but the charnel-house within, and when we proceed further, and consider that the mystical cosmetic which produces every one of her hues, the great principle of light, for ever remains white of colorless in itself, and if operating without medium upon matter, would touch all objects, even tulips and roses, with its own blank tinge—pondering all this the palsied universe lies before us a leper; and like wilful travellers in Lapland, who refuse to wear colored and coloring glasses upon monumental white shroud that wraps all the prospect around him. And of all these things the Albino whale was the symbol. Wonder ye then at the fiery hunt? (p.264)

どのように美しい自然といえども、すべてみな巧みな欺らかしにすぎず、まるで神のように崇められる自然も、その魅惑の底には死体部屋をもつ売笑婦と同じように化粧したものにすぎない。自然のありとあらゆる色調を造りだすその神秘的な化粧品とも云うべき光線は、それ自体では、白色または無色であり、どんなに美しい花であっても、光の媒介がなければ、空白 (void) の色に染まっているのみである。このように考えると、宇宙は、生気を失った癩病者としてわれわれの前に立つ。そして哀れな背信者は、ラップランド旅行のような、あたり一面の白色の大経帽子きょうかたびらの前に盲いたように茫然となる。ところで、白子鯨とは、以上のすべてのものの象徴である。それでは、この燃えるような追跡をあなたは不思議に思うには当たらないではないか。(阿部)

ここには、自然の美しさに目を奪われてその本質を見究めなければ虚しいばかりである。自然そのものは仮面であって、そのうしろが空白 (void) であることを知らねばならない、仮面のうしろには、白い衣をまとったあの世のラザラスのような姿があることを知らねばならない、という現実認識の必要がまず説かれている。ここまでの自然について

『白鯨』のかくれた意味と象徴(8)

ての第一段階の認識が虚無観にみちているので、人はそこで立ち止まってしまい、Melvilleの自然観あるいは人生観は悲観主義であると思いきや。しかし、Melvilleはほんとうに悲観論者だろうか。上の引用文には、つぎのような意味も含まれている。空白とは、無色、あるいは、たんなる無、ではなく、無のように見えはするが、じつは、すべてを包含するところの、豊富さ、であることを人は知るべきである。経帽子をまとったラザラスが復活することができたことを人は知るべきである。白子鯨は、無と同時に豊富さ、死と同時に生、を象徴していることに、人は気づくべきである。

上の引用文のすぐ前に、つぎのような文がある。

②Is it that by its indefiniteness it shadows forth the heartless voids and immensities of the universe, and thus stabs us from behind with the thought of annihilation, when beholding the white depths of the milky way? or is it, that as in essence whiteness is not so much a color as the visible absence of color, and at the same time the concrete of all colors; is it for these reasons that there is such a dumb blankness, full of meaning, in a wide landscape of snows—a colorless, all-color of atheism from which we shrink? (p.263-4)

銀河の白い淵を眺めるとき、とらえどころがないためだろうか、心も消えんばかりに、宇宙の虚無と広漠さにとらえられ、背筋から虚無感に突き刺される、と書かれている。しかしこの虚無感は、書かれているように、無神論者が感じるものである。荒涼とした雪景色は、おしだまったままの空白dumb blanknessでもって迫るが、ここには深い意味full of meaningがふくまれている、とMelvilleは云う。それは、無神論者は、dumb blanknessを感じはするが、full of meaningの方は理解できないからである。それでは汎神論者のばあいはどうか。汎神論者とは、ここでは、自然を見てその背後に神の働きを認めるキリスト教徒、ということに限ってみよう。白とは色というより色の無いことを見た状態、しかも同時にあらゆる色を凝集させたもの、と認識したとき、無神論者は、経帽子をまとったライ者のようなmortalityを見るが、汎神論者は、つぎの文にあるように、

③But not yet have we solved the incantation of this whiteness, and learned why it appeals with such power to the soul, and more strange and far more potentous why, as we have seen, it is at oncc the most meaningful symbol of spiritual things, nay, the very veil of the Christian's Deity, and yet should be as it is, the intensifying agent, in things the most appalling to mankind.(p.263)

キリスト教徒の神の衣そのもの the very veil of Christian's Deity を見る。これは、汎神論者にとっては、化粧を落した裸の自然は白い衣をまとった神そのものの姿、ということになる。この神の姿は、真白な、光り輝く衣をまとったキリストの変容、(Transfiguration)の図であると考えてよいだろう。キリストの変容については、マタイ伝(17:1

～13)、マルコ伝(9:1～13)、ルカ伝(9:28～36)に記<sup>しる</sup>されている。

his face did shine as the sun and his raiment was white as the light (Matthew)  
and he was transfigured before them. And his raiment became shining,  
exceeding white as snow, so as no fuller on earth can white them.(Mark)

And as he prayed, the fashion of his countenance was altered, and his raiment  
was white and glistering. (Luke)

いづれも、キリストの顔が太陽のように光輝き、上衣が雪のように白く光り輝いた、とある。汎神論者と無神論者とは、このように、自然を観照するとき、まったく正反対のものを見ることになる。日本でも、浄土思想が確立するまでは、無常観、もののあわれ、などといった自然観があり、それは、無神論者の自然観に近い。カトリック暦には、キリストの変容の祝日というのがあって、それは8月6日である。この日は、立秋の日であって、暦の上では、この日から秋に入る。カトリック暦では、太陽がキリストの象徴であるから当然であろうが、太陽の動きがきめこまかく祝祭日として採り入れられており、したがって、カトリック暦は自然の移り変わりを反映して季節感あふれるものとなっている。また、ちなみに、日本の俳句では、十七文字の中にならず季節をあらわす季題を折り込まねばならず、その季節は、日本では一年を二十四等分して、二十四節季あり、その二十四の季節のそれぞれが俳句の中に盛られたであろうから、俳句も自然の移り変わりを微妙に反映していた。昨今、欧米で英語で俳句を作るのが盛んであるが、見受けるところ、季節が採り入れられていないので、本来の俳句とは違ったものになっている。

上に挙げた引用文①、②、③のうち、引用文③がMelvilleの自然観を総括するものであり、③を見落として①②のみで判断すると、Melvilleの自然観のみならず、彼の世界観をまったく見誤ることになる。①、②、③の引用文は、テキストの中では、③②①の順に並べられており、そのため読者の判断が迷わせられることになる。おそらく、Melvilleは、意識して、このような並べ方をしたのだろう。上の①、②、③の引用文を、聖書の「伝道の手紙」と比較してみると、Melvilleの自然観が一層理解し易い。「伝道の手紙」は、聖書の自然観をあらわしており、MelvilleのあるいはEmersonの自然観と一致している。この書では、自然の移り変わりを観照して、すべては空しいall is vainと嘆じているように見える。しかし「伝道の手紙」は、けっして、虚無的な自然観を伝えているのではない。一つの根本的な文を読み落とさなければ、である。「伝道の手紙」では、つぎのように記されている。

① Vanity of vanities, saith the Preacher, vanity of vanities, all is vanity.

(1:2)(12:3)

③ I have seen all the works that are done under the sun, and, behold, all is

vanity and vexation of spirit.(1 : 14)

④ Remember now thy Creator in the days of thy youth, (12 : 1)

⑤ Let us hear the conclusion of the whole matter, Fear God, and keep his commandments: For this is the whole duty of man. (12 : 13)

② What profit hath a man of all his labor which he taketh under the sun? One generation passeth away, and another generation cometh, but the earth abideth for ever. The sun also ariseth, and the sun goeth down, and hasteth to his place where he arose. The wind goeth toward the south, and turneth about unto the north, it whirleth about continually, and the wind returneth again according to his circuits. All the rivers run into the sea, yet the sea is not full: unto the place from whence the rivers come, thither they return again.

(1 : 3~7)

伝道者のことば。

①空の空。伝道者は云う。空の空。すべては空。日の下で、どんなに苦勞しても、それが人に何の益になろう。

②一つの時代は去り、次の時代が来る。しかし地はいつまでも変わらない。日は上り、日は沈み、またもとの上る所に帰って行く。風は南に吹き、巡って北に吹く。巡り巡って風は吹く。しかし、その巡る道に風は帰る。川はみな海に流れこむが、海は満ちることがない。川は流れこむ所に、また流れる。

③私は、日の下で行われたすべてのわざを見たが、なんと、すべてがむなしいことよ。風を追うようなものだ。

④あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。

⑤結局のところ、すべての結論は、「神を恐れよ。」これが人間にとってすべてである。

ここで述べられているのは、すべては同じことの繰り返しであること、自然の営みや四季の移り変わりがそれを示している、ということである。人のすべての営みは、むなしい、ということである。もし人が、若いときに、神の存在に気づかなければ、すべてはむなしいことになる、と説かれている。

Melvilleの自然観と伝道の本に書かれていることとを比較してみると、同じ内容のことが説かれているのだが、書かれている順序が逆になっているのに気づく。伝道の本では、結論が最後に来ているが、Melvilleのばあいは、結論が始めに置かれている。そのため、Melvilleの自然観が無神論者のそのように、まぎらわしく見える。白色は、キリスト者にとっては、キリストの変容のときに見られた光り輝く衣の色であり、無神論にとっては、ライ者の衣の色である、とMelvilleは、見る者の世界観の違いによって、白色は正反対の意味をもつのだ、と述べていることに、読者は気づかねばならない。自然という

仮面のうらにある白色は、汎神論者にとっては、生命の色であり、無神論者にとっては、死の色である、とMelvilleは述べている。そしてMelvilleは、すでに見てきたように、白色は霊的なものの意味深い象徴、つまり、キリストの衣そのもの、the most meaningful symbol of spiritual things, nay, the very veil of the Christian's Deityである、という意見に立っていることに読者は気づかなければならない。

秋分点でPequod号が沈むことになるが、この意義は深いものがある。Melvilleは、1991年の9月27日に没しているが、この頃から、太陽が秋分点を越えて、1日ごとに昼の時間が短くなっていく。Melvilleの死が、偶然Pequod号が去っていくのと軌を一にすることになったのかどうかはわからない。Melvilleはそのとき72才であったから、おそらくたまたまそうなったのであろうが、この頃つまり9月29日は、St. Michelの祝日に当たる。この日は、St. Michelが人の魂を天国へ導き入れるといわれている。

### 'A Bosom Friend'

第X章の'A Bosom Friend'は、どちらかといえば、第II章'The Carpet Bag'に似ているところがあって、他の章の解決のための手掛りが伏せられているといった趣きのある章である。この章の表題のThe Bosom FriendのBosomは、前章で延べたように胸(chest) との関連で浮き立たせられた語である。

Ishmaelは、彼自身がキリスト教徒であることとQueequegの偶像崇拜を受け入れることとは彼自身の宗教信条に抵触しない、と云う。このことが、この章の特色である。この章は、短いけれども、さまざま問題をふくんでいる。

Ishmaelが教会堂から帰ってみると、Queequegは、暖炉の前の椅子に腰掛けて両足を炉床にのせて、片手に黒い木偶人形をにぎり、顔にすり寄せてしげしげとその顔もみつめ、その鼻を念入りに削りながら、奇妙な節廻しで鼻歌を口ずさんでいる。

He was sitting on a bench before the fire, with his feet on the stove hearth, and in one hand was holding close up to his face, and with a jack-knife gently whittling away at its nose, meanwhile humming to himself in his heathenish way. (p.81)

Queequegは木偶の鼻から木屑を削っているが、汐吹亭の主人のPeter Coffinも前夜木切れを屑って (whittling) (p.44) いた。Peter Coffinはまた、木椅子に鉋をかけて、その木屑を暖炉に投げこんで燃してしまう。

So gathering up the shavings with another grin, and throwing them into the great stove in the middle of the room. (p.42)

Peter Coffinが木屑を燃やした暖炉は、部屋の中央にあり、大きくかさばって、人が通り抜けられるぐらゐの暖炉である。これが不死鳥が身を焼く火山にたとえられているこ

とはすでにのべた。Queequegが削る木屑は、鼻のあたりから削られていることから考えて、彼がくゆらせるパイプの煙と関係があるのだろう。Ishmaが申し出て、二人は煙草を交わす。煙草の煙が鼻から出ることとQueequegが木屑を削るとき彼の鼻を木偶にくっつけるようにしていることを結びつけて考えざるをえない。Queequegは礼拝するとき、ふたたびその木偶の鼻に接吻する。Ishmaelもそれをまねて同じことをする。

So I kindled the shavings; helped prop up the innocent little idle; offered him burnt hiscuit with Queequeg; salamed before him twice or thricc; kissed his nose; (p.85)

煙草が終ると、Queequegは、額をIshmaelの額にすりよせ、腰を抱いて、二人は夫婦になる、胸を分かちあう友 (bosom friend) になって、いざというときには、QueequegはIshmaelのために死のう、という意味合いのことを云う。

QueequegとIshmaelの実体は融合しあって、Queequegは、Queequegでなくなり、Ishmaelの半身になってしまうかのようである。IshmaelとQueequegは、二人で一人になってしまうかのようである。黒ん坊偶像を媒体として、IshmaelとQueequegは合体 (unite) (p.85) して一つになってしまう。二人は、たがいに額と額、鼻と鼻、腰と腰、そしておそらく胸と胸をくっつけ合って、その儀式によって、二人は一人になり、QueequegはIshmaelの影になってしまう。Ramadanの章で、二人が双子座のCasterとPolluxの関係にあるかのような暗示があるが、The Bosom Friendとは、二人がそうした関係にあることを示しているものとおもわれる。そういえば、双子座は、船乗りと航海の安全を護る守護星座である。黒い木偶像の名はYojo (p.103) というが、この名の綴りは、よく見ると人の顔に見える。ふたつのoは眼である。jの字は、鼻および、いわゆる第三の眼といわれているものとである。Yは、宇宙樹のYgdrasilではないだろうか。この樹は、宇宙をささえ、その根と枝は天界、地界、地下界を連らねるといふ巨大なとねりこの木である。この木偶と顔と顔をつき合せる、とは、たがいに眼の中を眺めあって実体が交感しあうことを意味するのではないだろうか。このようにアルファベットの文字を象形としてとらえて、文字そのものと意味を不可分に重ね合せる方法は、*Moby-Dick*のいたるところにみられる。このように、文字そのものを呪術的というべきか、それとも根源的というべきか、このような用い方を、Melville以外に、試みたものがあつただろうか。また、見るという意味で、seeのかわりにlookの語が使われるとき、lookの二つのoが象形的に使われているのである。第IC章 'The Doubloon' 参照。

Queequegの顔が、南米大陸の地形をかたどったしゃれこうべのような印象を与え、その鼻筋が太平洋側に南北に連なるPathagonia山脈のように見え、Cape Hornが鼻孔に当るかのようである、ということについてはすでに述べた。Yojoを媒体にしてQueequegとIshmaelは、いってれば合一化の儀式を通過したことになるが、このときYojoの鼻が

Cape Hornを象徴しており、二人はCape Hornに対しても恭順の意をあらわし、同時にCape Hornを彼らの内に包みこんでしまおうとしたと考えられる。彼らの鼻とパイプの煙、これは汐吹亭の部屋の真中にある暖炉や煙突と同様、火山の象徴であり、復活を願うことであるのはいうまでもない。

超絶主義を押し進めた考え方とおもわれるが、*Moby-Dick*でMelvilleが主張する概念がある。それは、精神は外面にあらわれるものだ (You cannot hide the soul) (p.52) という考え方である。Melvilleは、ごく一般的に云われている意味で云っているにすぎないのではない。Queequegの容貌には、彼の高潔な精神があらわれているばかりではない。Queequegの頭部は優秀な骨相をそなえていて、General Washingtonの胸像をおもわせる、とIshmaelはいう。教会堂の中の壁面の大理石の碑文に、Willis(William) Elleryの名があった。これは、アメリカ独立宣言文の署名者の一人の名であるから、George Washingtonの名に似ていることとあわせて考えると、Queequegが、精神の独立不羈を保っていることを示している。これだけにとどまらない。Queequegの眉毛は、頂きが密林で厚くおおわれた岬角 (promontories) をおもわせる。

Certain it was his head was phrenologically an excellent one. It may seem ridiculous, but it reminded me of General Washington's head, as seen in popular busts of him. It had the same long regularly graded retreating slope from above the brows, which were likewise very projecting, like two long promontories thickly wooded on top. (p.82)

精神は外面にあらわれるという考え方は敷衍されて、Queequegの内面のCape Hornが、密生した緑におおわれたCape Hornのような眉と額になって、彼の外面にあらわれている。Queequegは、故郷を約2万マイル離れて、Cape Horn廻りで文明国に来ていることになっている。

He was a man some twenty thousand miles from home, by the way of Cape Horn, that is—which was the only way he could get there—(p.83)

Queequegの精神の崇高さ、叡知、静謐さ、そういった抽象概念を、Ishmaelは、内面のCape Hornと呼んで、表象でもって表現している。Queequegは、Cape Hornの象徴であると云ったほうがむしろよい。Queequegの顔の相がCape Hornをあらわしているという考え方は、相対的に、白鯨の顔の前面が何をあらわしているかという問題に飛躍していく。内面の精神は外面にあらわれるという考え方を、Ishmaelは、白鯨の顔にも当てはめていこうとする。第LXXXIX章 'The Prairie' 参照。しかし一方では、Ishmaelは、大自然の美しさを厚化粧をほどこした売春婦にたとえ、自然の内面は、nothing but the clarnel-bouse within (p.264) であると云って、内面と外面の落差の大きさを指摘する。現世の安寧が本来の魂のそれと相反するものであるという考え方も *Moby-Dick* の中に大

きく支配している。これは、宗教的弁証法とでも呼ぶべきものであるが、一方で、内面と外面は一致するとするCounterpane (Courterpartの意として) の考え方も *Moby-Dick* の中に大きく存在する。二つの考え方は矛盾するようにみえるが、これは、見る人の観点が違えばまったく正反対の解釈が成り立つ、という象徴言語の特色をあらわしている。

Queequegは、人喰いの偶像崇拝者として紹介されているから、言葉の上から判断すれば、キリスト教とはまったく相入れない印象を与える。人喰いという考え方は、しゃれこうべ (Golgotha < skullの丘) というキリスト教にとってもっとも重要なモチーフの一つから派生した象徴にもとづいている。偶像崇拝といっても、キリスト教正統旧教は偶像崇拝に類する礼拝形式をとっているといえなくもないのである。Queequegの木偶も、考えてみれば、ただ言葉上、眼をあらわす象形文字にすぎないのである。極端に解釈すれば、人喰いの偶像崇拝者であろうけれども、本質的には、Queequegは、キリスト教倫理にも規範にももとるところはないのである。彼の礼拝形式も、木屑の香を焚き、燔祭として焼ビスケットを捧げているだけのことである。すでにのべたように、木屑を焚くのは、根底に、復活を願う意味をもっているのであるから、Ishmaelのキリスト教と相入れないものではない。このばあい、Ishmaelが彼自身長老派教会に育まれた正しいキリスト教徒であると言明していることのほうが注目に値する。つまり、*Moby-Dick*が、全体として、Ishmaelの視点からみて、キリスト教神学論理から大きくはずれているとは云えないからである。Ishmaelはいう。

I was a good Christian, born and bred in the bosom of the infallible Presbyterian Church. (p.85)

Ishmaelは、不可謬の長老派教会の胸の中で生れ育った、立派なキリスト教徒であった、という。Ishmaelは、第XVIII章 '*His Mark*' でQueequegを生れながらにして第一組合教会(the first Congregational Church) (p.128) に所属しているといって紹介する。Ishmaelは、彼自身もQueequegも大きな普遍的な意味でのキリスト教徒である、と云っているようであり、Queequegが既存の第一組合教会に所属していなかったのと同様に、Ishmaelも実際の制度化された長老派教会に所属していたとはおもえない。長老派とか第一組合教会という意味がもっと広義に解釈されているのである。長老とは、父なる神アダムやヨナ、またアブラハム、など、根本的な意味での父祖たちを指している。第一組合教会は、ニュー・イングランドに栄えた宗教で、個々の地域教会の独立をつよくみとめた宗派であるから、Ishmaelは、Queequegの独立の精神を指して第一組合教会と云ったのだろう。Ishmaelの云うキリスト教は、既存の教会組織の枠をはるかに超えたものである。それは、ヨナが神によって遣わされたところのニネベの町の民が異教徒であったことと同様に、異教徒もその中に包みこんでしまう、そういった規模のものである。

IshmaelとQueequegの泊っていた部屋の暖炉について考えてみよう。Ishmaelが部屋

に帰ってみると、Queequegは、暖炉の炉床の上に両足を乗せている。また夕べの祈禱をはじめるときに、暖炉の中に木偶を立てるために、紙製の暖蓋を取りのけている。ということは、暖炉には火の気がないことになる。つぎの第XI章からも部屋に火の気がないことはあきらかである。二人で心と体を暖めあうことが、部屋の内外の寒さと対比されて、より大きな意味をもつことになる。それでは、次の文は、どういう意味だろうか。

As I sat there in that now lonely room, the fire burning low, in that mild stage when, after its first intensity has warmed the air, it then only grows to be looked at; the evening shades and phantom gathering round to casements, and peering in upon us silent, solitary twain; the storm booming without in solemn swells; I began to be sensible of strange feelings. I felt a melting in me. (p.83)

「かくて私はその寂しい室に座っている。炉の火は、ひときわ燃えさかって空気を暖めた後、ただ眼に愉しいほどに輝きながら、柔らかに低く炎をあげていた。窓のあたりには黄昏の影と幻が寄せてきてただよい、言葉もなくぼつねんとしているこの二人を覗き込んでいた。外面の暴風は暗澹として湧き立って咆哮していた。私はあやしい感情が内に起るのに気づいた。身のうちがとろとろと融けるような気持だった。」(阿部)

暖炉に火はなかったはずである。上の文で暖炉の火云々は、現在時制でかかっている。has warmedとglowsが現在完了と現在時制になっており、ほかのburning / gathering / peering / boomingが分詞構文であるから、分詞構文をつかってある部分の時制が過去であるか現在であるか目立ちにくい。おそらく、Mevilleはそれを考慮に入れた上で、これらの構文や時制を用いているものとおもわれる。そういったことを考慮に入れて、この文を考えてみると、この暖炉のぬくもりは、Ishmaelが心の中で感じ取った心理的なものであることになる。IshmaelがQueequegにたいして感じた心理的なものであることになる。この心理的な暖炉のぬくもりがIshmaelの心をまずとろける思い (a melting in me) にさせる。そしてIshmaelをこのようなおもいにさせたのが、窓の外に凝縮するようしるのび寄ってきたevening shades and phantomsであるとおもわれる。Moby-Dickでは、姿かたちを持たぬものの存在が大きく関わって、重要な役割を荷って行く。Ishmaelは、それらの形にあらわれぬ存在の動きを敏感に感じとって、それらの動きに支配されていく。You can not hide the soul. (p.82) のsoulは、内なるものと外なるものとの両方に当てはまることになる。内なるsoulと外なるsoulがたがいに呼応しあって、内なるsoulが形あるものに影響を与え、形あるものを動かしていくことになる。Ishmaelの心理がQueequegにも伝播・感応されていって、二人は一人であるかのように、たがいにunite (p.85) された状態になっていくが、Queequegの心の中に、もし一片でもIshmaelにたいして氷のかけらが残っていたとしても、それも、たがいにパイプを交わすことによって、とけ

去ってしまう。煙草の火と煙が、暖炉の暖かさとがたがいに相似形となり並列進行のかたちをとっている。暖炉の煙突と、人の高く秀でた鼻柱とが並列関係になっている。Ishmaelが部屋に入ってきたときQueequegが暖炉の炉床の上に両足を置いていたことや、Queequegが木偶を礼拝するために紙の炉蓋をはずして暖炉の中に立てたことも、汐吹亭の広間の中央にある大きな暖炉に木屑を投げこんだ意味も、結局、Queequegの鼻がCape Hornにたとえられていたことからわかるように、すべて、Cape Hornが象徴するところのものに連なるためであることがわかる。煙突が不死鳥の飛び立つ火山をまねたものであったが、Cape Hornも復活と結びつけられていることがわかる。

If there yet lurked any ice of in difference towards me in the Pagan's breast,  
this pleasant, genial smoke we had, soon thawed it out, and left us Cronies.  
(p.84)

この文の pleasant, genial smokeがIshmaelが心の中で感じた暖炉の暖かさと一致するものであり、その暖かさがQueequegの中に残っていたかもしれぬ氷(ice)をとかした(thawed)ことになる。この文のto be looked atとin that miled stageについてであるが、暖炉の火がじっとみつめることのできるおだやかな状態の段階にあるときに、とは何を意味するのか。部屋の暖炉には、そのとき火が入っていないにもかかわらず、入っているかのような錯覚をおこさせるのはなぜか。存在しない暖炉の火の存在感を高めるためであるかもしれないし、形のあるものと形のないものとの間に壁がないという意味なのか。それとも形のあるものより形のないものの方が実質が豊かであるという意味なのか。あるいは、両方の意味をふくんでいるのかもしれない。この章を理解するためには、超絶主義的な考え方の、精神は外面にあらわれる (you cannot hide the soul) が、手掛りとなる。Ishmaelの心の中の形をもたぬ暖炉の火が、IshmaelとQueequegとの間の心の壁を取り払い、二人をuniteさせてしまうという現象を外界にも投影させるということであろうか。

Queequegのもつ木偶Yojoが、みつめる、という意味をあらわすことについては述べたが、Pipが、“I look, you look, he looks, we look, ye look”(p.556) というが、このlookという語にも眼玉が二つあるといえる。みつめるということは、*Mohy-Dick*の中で重要な意味をもっている。Ishmaelは、窓の外をみつめるふりをして、Queequegがなにをしているかじっとみつめている。みつめることの意味について考えてみなければならない。Ishmaelは、窓の外を見ているようなふりをして、Queequegを観察していたが、彼自身も窓ガラスごしに外から影と幻によって覗きこまれている。Ishmaelは、外から幻によって覗きこまれることによって影響を受けて心境に変化をきたす。その幻からエーテルのような波動がIshmaelの心の中に入ってきてIshmaelに変化をおこさせるのであるが、どこから入ってきたかといえば、眼からであろう。Ishmaelが窓の外を覗きこんだとき、

彼は幻と向きあったことになる。Ishmaelが見たものは、ガラスにうつる彼自身の映像であったかもしれないが、そうすると、彼の見た映像は、Narcissusが見た水面にうつる映像と同じ質のものであることになる。Narcissusは、幻を把握できぬいらだちから、みずから幻と現身との境界である水面を突き破って、その幻と同化しようとしたが、Ishmaelのばあい、幻が、窓ガラスという境界線を超えてIshmaelの中に入ってきたことになる。みつめ合うことによって幻と交感しあったことになる。精神と肉体は、Narcissusとその幻のような関係にあることになる。精神と肉体の間には、薄い壁があって、それが、鏡のような水面であったり、部屋の内と外を仕切る夜の窓ガラスであったりする。内と外の接点となるいわば通路のようなものが、みつめ合うという眼の働きであることになる。Ishmaelが窓の外に感じた幻は、彼自身の大霊であったかもしれないし、または、彼自身の大霊をふくめたもっと大きな、彼の運命を導く神なるものの意志の幻であるかもしれない。IshmaelやNarcissusの見た幻は、外面にあるというよりむしろ内面にあることになり、人の眼は、外面を見ているというよりむしろ内面を見ていることになる。したがって人が大霊とつながるための通路も人の内面にあることになる。みつめるという行為が、人の内面に通路をひらくことになる。QueequegのYojoは、みつめる、ということと、通路をひらく、ということの表象である。Yojoはまた、人の内面と外面をつなぐばかりでない。現世と他界とをつなぐ通路もまた、神の眼と人の眼とがむすばれるところであると考えられていることになる。説教壇のうしろにあった絵画にえがかれた旋風の中の眼のような、円形の空間は、神と人とをつなぐ通路であることになる。雲間からさしかかる光線が船に注がれたように窓の外の幻が放射する波動がIshmaelの中に彼の眼をとおして注がれたという並列の関係があることになる。台風の眼は、云ってみれば、神の眼という不可視の実体がイメージ化されたものである。

Ishmaelが部屋に入ってきたためにQueequegはYojoをしまいこんだ (put up)(p.81) のだろうか。Queequegはまた、夕べの礼拝をするためにYojoを取り出した (took out)(p.85) のだろうか。この章では、みつめることによる同化が問題になっているのであるから、Yojoをしまいこんでしまうとはおもえない。he put up the image (p.81) には、しまいこむ、の意もあるが、このばあいは、表象をかかげる、象徴の意をはっきりさせる、の意がうかがえる。Ishmaelは、彼自身も偶像崇拜者にならねばならぬ (I must turn idolator)(p.85) といって、偶像崇拜などという異教徒である印象を与えようとする意図がみえるが、それは、表面の意味とかくされた意味とが大きく相違するようにさせ、意外性と、かくされた意味の発見をさまたげることを、意図したものとおもわれる。Ishmaelは、偶像を立てる手伝いをする (helped prop up the innocent little idol) (p.85) が、この立てる(prop up)は、支援する、などの意があって、さきほどのput upと同じような意味をもっている。Ishmaelは、取り出す (take out) という語も用いて、

He then went about his evening prayers, took out his idol and removed the paper fireboard. (p.85)

このtake outも、明るみに持ち出す、吐露する、などの意があって、象徴としてのYojoを示す、の意がみられる。Ishmaelは、Yojoにたいして、偶像と呼んでおりながら、一方では、innocentという語を用いて、無邪気な、可愛い、の意のうらに、Yojoが偶像と呼ばれる罪をおかしていない、の意がくみとれるような表現をしている。この文で、炉蓋が紙製であることわっているのは、暖炉に実際には火は入っていないのだということを示すためだろう。これに類するかくされた意図は、Queequegの持つ頭骨からも読みとることができる。

Queequegは、頭骨をIshmaelに贈物にすると云うが、この同じ頭骨を彼らは、かつら台として散髪屋に売り払ってしまう。これも表面上の意味であるにすぎない。

He made me a present of his embalmed head. (p.84)

この文のa presentは、目的格ではなく目的格補語である。He made me a presentは、よそわれた文である。この文の意味は、Ishmaelが捧げ物にされた、という意であって、Ishmaelが、QueequegがYojoにささげる焼ビスケットの燔祭にされた、の意であって、頭骨には、Golgothaの丘の比喩と、Queequegの頭部同様ホーン岬の象徴とがふくまれているのである。このことは、第X章 '*The Wheel Barrow*' のつぎの文からもあきらかである。

Next morning, Monday, after disposing of the embalmed head to a barber, for a block (p.91)

表面上は、翌朝、つまり月曜日の朝に、彼らとその頭骨を処分したことになっているが、barberのbarbは、矢じりのあご、ほこさき、などの意があって、barberは、鋸、を意味することになる。またblockからは、to be headedの暗示があり、その頭骨は香を焚いて聖別されているのであるから、儀式のための捧げもの、の意はあきらかである。blockには、shears (p.679) と呼ばれる台木、滑車台の梁、などの意がある。これには、十字架台、祭儀のための祭壇など、キリストにならう意図が感じられる。shearsの意義については、第CXXXI章 '*The Pequod meets the Delight*' を参照。Delight号は、Pequod号が会う最終の船であるから、秘跡の成就の最終段階に十字架上の死があることになる。Mapple神父の説教の主調がDelightであったが、彼はこのDelightをヨナが鯨にのまれて深淵に降るよりもっとおそろしいこと (more awful lesson) (p.79) と形容した。それは、Delightのための死が、Ahabのように自発的なものでなければならぬからであった。'*A Bosom Friend*' の章では、IshmaelとQueequegが、航海にさきだって、何をしているのかという疑問がおこると同時に、それにたいする答えが用意されていることを知るべきである。

Queequegは、本のページを、50枚を一区切に、また続けて50枚というふうに、数えている。この意味は、よくわからないが、fifty-fiftyという語のつかい方があるから、半分

に二等分といったようなところかもしれない。Queequegは銀貨を二等分してIshmaelに与えている。二人はたがいに自己を共有しあっていくことになる。たがいに双子の兄弟のような関係を示すために、Melvilleはこうした多分にこじつけのようなイメージを用いようとしたのだろうか。QueequegとIshmaelがめくっている本は聖書であろう。Ishmaelが、あえていえば、偶像教徒としてのQueequegを受け入れたように、QueequegもIshmaelの聖書を受け入れたというふうに、考えることができる。Queequegは、偶像教徒などではなく、キリスト教の本質からまったくはずれることがないのであるが、あえて表面上の外観から判断すれば、彼はキリスト者ではない。そのQueequegと、キリスト者をもって任ずるIshmaelとの融合を示すために、最初にQueequegがページをめくり、それにIshmaelも応じて、二人でページをめくり、Ishmaelは、聖書の印刷の意義と挿絵の意味を説明し、Queequegの興味をとらえる。これは、IshmaelがQueequegの礼拝にあずかったのと同じ意味をもつ。二人は、たがいの宗教を融合させたことになる。Ishmaelは、窓の外の幻 (phantom) と融和したように、いわばQueequegの魂とも溶け合う。この本が聖書であることは、テーブルの上に置かれている大きな本 (going to the table, took up a large book there)(p.81) または、不思議な本 (counting the pages of the marvellous book) (p.82) という語句からわかる。宿屋のテーブルに一冊だけ置かれてある大きな本とは、聖書以外にないだろうし、marvellousは、Ishmaelからみても marvellousであるだろうからである。Ishmaelは、印刷の意味を説明したというよりむしろ、聖書の目的を説明したのだろうか。printingの前に定冠詞のtheがあるからである。

We then turned over the book together, and I endeavored to explain to him the purpose of the printing, and the meaning of the few pictures that were in it. There I soon engaged his interest, and from that we went to jabbering the best we could about the various outer sights to be seen in this famous town. (p.84)

不明瞭ながら (jabbering) 意をつくして話し合っている内容は、この町の物見遊山についてではないだろう。this famous townは、復活にあづかることのできる堅固な墳墓、という意味の、象徴としてのNew Bedfordを意味しているとおもわれる。また、第X章のXには、ふたつの実体がたがいに溶け合い相乗される、というcrossの意味が含まれていることになる。

使用テキスト：*Moby-Dick or the Whale ed. by Charles Feidelson Jr. (Bobbs Merrill, 1978)*  
：p.23 l.14からp.30 l.11までは、平成2年度秋季ソーロー学会で口頭研究発表をしたもの。